慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	「言外の意」の遠近法 : その多様性、および詩經の意味の重□性における位置付け
Sub Title	The perspective of connotation : its variety and the relation to multiple layeres meanings of Shijing poems
Author	種村, 和史(Tanemura, Kazufumi)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2020
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. 人文科学 (The Hiyoshi review of the humanities). No.35 (2020.) ,p.327 (60)- 386 (1)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10065043-20200630-0386

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「言外の意」の遠近法
――その多様性、および詩經の意味の重層性における位置付け――

種村和史

1　はじめに

北宋・司馬光の『溫公續詩話』に次のようにある。

詩經小雅「苕之華」卒章に、

　牂羊墳首　　牂羊（しやうやう）墳（おほ）いなる首（かしら）あり
　三星在罶　　三星　罶（りう）に在り

とある。これは長くは續かないことを言う。古人が詩を作る時、「意は言外に在り」ということを尊んだ。讀者をして思いを巡らせて感得させるので、故にこれを詩に歌った者は罪せられることがなく、これを聞く者は教訓を得て自らを戒めることができるのである。近世の詩人の中では、ただ杜甫こそが、もっとも詩經の詩人のスタイルを體得していた。例えば、

國破山河在　　國破れて山河在り
城春草木深　　城春にして草木深し
感時花濺涙　　時に感じては花にも涙を濺ぎ
恨別鳥驚心　　別れを恨みては鳥にも心を驚かす

において、「山河在り」は、他には何もないことを明らかにする。「草木深し」は、人がいないことを明らかにする。花や鳥というのは、平時は人を樂しませる物なのに、今やこれを見ると泣き、これを聞けば悲しむ。ここからいかなる時勢であるかが知られる。他の作品もみなこれに類しており、一々列擧できないほどである（詩云、牂羊墳首、三星在罶。言不可久。古人爲詩、貴于意在言外、使人思而得之。故言之者無罪、聞之者足以戒也。近世詩人、惟杜子美最得詩人之體。如國破山河在、城春草木深。感時花濺涙、恨別鳥驚心。山河在、明無餘物矣。草木深、明無人矣。花鳥、平時可娯之物、見之而泣、聞之而悲、則時可知矣。他皆類此、不可徧擧(1)）

小雅「苕之華」は小序に據れば、西周は暗君幽王のもとで異民族の侵略に苦しみ戦争が頻発し、そのために饑饉が起こった。もはや滅亡は避け難い國家の慘憺たる状況に身を置いて、大夫が時勢を憂えた詩だと言う。(2)「三星（鄭箋に據れば、二十八宿の一つである心宿のこと）(3)罶(やな)(4)にあり」の句について、司馬光は「久しくすべからざるを言ふ」という意味であると言っているが、これは毛傳の同文の訓釋に據ったものであり、彼が漢唐詩經學の解釋を踏襲していることがわかる。『毛詩正義』（以下、『正義』と略稱）の本句の解釋に據れば、寡婦が魚を捕らえるために川に簗(やな)（川の流れを堰き止めて魚を集めて捕まえる漁具）を仕掛けているが、その簗(やな)に堰き止められた静かな水面に心宿の三つ星の光が映っているという意味で、この美しい光も天の運行に伴って、もうすぐ水面から消えてしまうだろうと、詩人は感慨を催している、今にも消え去らんとする光に、亡國の危機に瀕した西周の運命を重ね合わせ嘆き悲しんでいるのであると言う。(5)

右の詩句には、詩人の心に滿ちる憂悶は直接詠われていないが、讀者（聞き手）(6)はそれを心に感じ取る（「意は言外に在り、人をして思ひて之を得使む」）。このような歌い方を詩經の詩人たちが重んじたと司馬光は言う。なぜこのような歌い方が重んぜられたのであろうか。司馬光は、毛詩大序の「言ふ者は罪無し、聞く者は以て戒むるに足れり」と結びつけて説明している。「苕之華」の作者は周王朝の現狀と行く末に對して深い憂愁の念を抱いていたが、それをあからさまに表現すれば、お上を批判した咎で處罰される恐れがあった。これを免れるために、自分の思いを直接詩句には表現せず、言わず語らず讀者に傳わるように工夫した。讀者は作者が「言外」に込めた意を感得し、それを自らの身に引き付けて反省の糧とすることができる。司馬光は、詩經の詩篇の持つ諷諫の機能に視點を据え、諷諫を安全にかつ確實に遂行するための、一種の韜晦のための意圖的な修辭技法として「言外の意」を位置付けている。

司馬光の言うように、「言外の意」が詩人が意圖的に用いた修辭技法であるとしよう。そうだとして、詩人が言外に「意」を仕込んでいることに氣付き、その内實を正確に理解するのは、讀者に委ねられたことである。したがって「言外の意」は、詩經の詩人がどのような修辭技法を用いて詩篇を作ったかという問題であると同時に、讀者が詩經の詩篇からどのような修辭技法をいかにして讀み取って解釋するか（したか）に關わる問題でもある。

詩經の詩人たちが重んじた「意は言外に在り」という歌い方は、近い時代の詩人の中で杜甫こそが最もよくしたと、司馬光は言う。ところで、彼が例として擧げる「春望」の一節は、右に見た「言外の意」の說明とは少しずれていると感じられないだろうか。杜甫の詩に時勢に對する慨歎と批判が込められていることはもちろん誰もが同意するであろう。また、司馬光が擧げる詩句に、表現された意味に止まらない、より深く大きな思考や感情が包含されていることにも同意するであろう。しかしそうだとしても、杜甫が自分が政治批判の廉で糾彈され處罰されないようにという實際的目的のために、自身の眞意が露呈することを嫌いそれを隱蔽しようとして、この修辭表現を選擇したとは、通常理解しないのではないだろうか。そうではなく、杜甫が寂寞荒涼たる心で外界の事物・風景に接した時に生じた心理的反應が自然に言語化されたものと受け取るのではないだろうか。これを「言外の意」と呼ぶとしても、「春望」の「言外の意」は杜甫の詩精神が自然に溢出したものと考えるのではないだろうか。

筆者は以前、翁方綱が嚴粲の「言外の意」說に對して批判的であり、翁方綱の「言外の意」の用法は嚴粲のそれと異質であることを指摘した[7]。翁方綱は、「文章表現という行爲においては、その措辭が作者の意思によるコントロールから外れて半ば無意識的になされることもある[8]」と考え、そのような狀況の中で、作者が半ば無自覺のうちに込めることになった、表現された詩句の明示的意味とは異なる意味内容を「言外の意」と呼んでいた。これは右に見た、

司馬光の考える「言外の意」とやはり異なっている。詩經解釋學史の内部においても、「言外の意」はその機能、目的、性質において、一義的に規定できないところがあることがわかる。

「言外の意」の多義性は、なぜ生まれたのだろうか。それらは相互にどのような關係を持っているのだろうか。また、そもそも「言外の意」という概念は詩經解釋學史において、どのような役割を果たしただろうか。そして、それは詩經解釋學以外の分野を含めた「言外の意」認識の中で、どのように位置づけられるのだろうか。

「言外の意」については、南宋の嚴粲、および晩清の方玉潤の詩經學を特徴づける重要な概念として、つとに黄忠愼氏によって詳しく分析されており[9]、その成果は、詩經解釋學史における「言外の意」の意義を考察するためのまたとない礎となっている。また、筆者もこれまで詩經解釋學史の様々な問題を考察する上で、「言外の意」を切り離して考えることができない局面にしばしば遭遇し、その都度斷片的ではあるが考察を積み上げてきた[10]。本稿では、黄忠愼氏の研究成果を踏まえ、筆者のこれまでの考察をも參照しつつ、詩經解釋學における「言外の意」に正面から向き合い、筆者なりの考察を進めたい。そのためしばしば、黄忠愼氏が取り上げている例、また筆者がかつて取り上げた例を、再度取り上げざるを得なかったこと、また論旨の都合上、これまでの論文と一部議論が重複する場合があること、了解されたい。

『溫公續詩話』の例からもわかるように、詩經解釋學史において「言外の意」という概念が含み得るものは、學者により、著述の種類によって極めて廣範で多岐に亘る。これらを全面的、統一的に考察することは今後の課題である。現狀は、そのような全體的研究のための基礎となる考察を積み重ねる段階で、したがって當面はある基準を立てて考察の視野を限定する必要がある。黄忠愼氏の研究からも明らかなように、早い時期の最もまとまった「言外の意」認

識が嚴粲によって提示されていることに鑑み、本稿ではまず、彼の『詩緝』が「言外の意」およびそれに類する語を術語として用いて詩篇解釋をしている例を考察の材料として取り上げ、嚴粲以前と以後の學者の經説と比較檢討しながら、詩經解釋學史における「言外の意」認識の意義とその變遷を考えるという方法をとる。さらにその後に、今後の研究の見通しを立てるために、嚴粲と近い時期に彼とは異質の認識を示し、「言外の意」概念が占め得た圈域の廣さを窺わせる事例も考察したい。

考察の出發點として、黄忠愼氏の研究に據って、嚴粲の「言外の意」認識の特徴を概觀しよう。嚴粲の「言外の意」解釋は、小序と詩篇との懸隔を解消し、詩經の美刺説を調整するために用いられる。[11] 嚴粲は「言外の意」が詩經國風と深い關係を持つとし、その「諷刺」「風化」の機能を強調し、[12] また「風人の意」は「言外」に寄寓されると言い、讀者に「體悟」させ「默會」させるという働き、[13] および「温柔敦厚」という理解の方式を強調した。[14]

この考察を承けて、筆者は以下のような問題を取り上げたい。

・「言外の意」は、小序（詩經の道德的性格を代表するもの）と關係して成立したことによって、詩篇解釋に何をもたらしたか。

・「言外の意」は、「温柔敦厚」という、主に人間の性格、感情のあり方に關わる問題とどのような關係があるか。またそれが詩篇解釋に何をもたらしたか。

・右の「言外の意」の二種の性格は、いかなる相互關係を持つか。

・「言外の意」は、いかなるメカニズムで讀者の「體悟」「默會」を實現させるか。

・嚴粲の「言外の意」認識は、どのような歷史的經緯を經て成立したか、また後世にどのような影響を與えたか。

・嚴粲の「言外の意」認識の獨自性は何か。

2　道徳的教えを讀み取る技法としての「言外の意」
――齊風「猗嗟」を例にして――

四庫全書經部詩類を徵するに、詩經注釋書の中で「言外」の語の使用例は、南宋・嚴粲『詩緝』の十七例が最多である[15]（内、林希逸序二例、南宋・呂祖謙『呂氏家塾讀詩記』〔以下、『呂記』と略稱〕からの引用一例、南宋・范處義『詩補傳』〔以下、『范補傳』と略稱〕からの引用一例を含む）。嚴粲以前では、『范補傳』に八例の「言外」の用例が用いられているのが目に付く。これから見ると、「言外の意」という概念の本格的な導入は、南宋以後の詩經學者によって行われたという作業假說を立てることができる。

しかしながら、「言外の意」に相當する解釋概念が南宋以前に存在しなかったわけではもちろんない。例として、『詩緝』に「言外の意」を用いて解釋を行っている齊風「猗嗟」を擧げよう（嚴粲の解釋については次節で檢討する）。本詩小序および經文全文を掲げる（訓讀は、基本的に『毛詩鄭箋』、古典研究會叢書　漢籍之部、汲古書院、一九九二、の淸原家訓點に據ったが、一部筆者の考えで改めたところがある。以下同じ）。

〔小序〕魯の莊公を刺った詩である。齊の人々は、魯の莊公が威儀もあり技藝にも優れているけれども、その母親が不義を犯すのを禮に從って防ぐことができず、子たる者の守るべき道を失ってしまったことを傷んだ。人々は莊公を〔母文姜の不義の相手で文姜の兄でもある[16]〕齊〔の襄〕侯の息子だと思っていた（刺魯莊公也。齊人傷

魯莊公有威儀技藝、然而不能以禮防閑其母、失子之道。人以爲齊侯之子焉)

猗嗟昌兮　猗嗟　昌んなり
頎而長兮　頎として長し
抑若揚兮　抑若として揚あり
美目揚兮　美目　揚あり
巧趨蹌兮　巧みに趨ること蹌たり
射則臧兮　射るときに則ち臧し

［首章］

猗嗟名兮　猗嗟　名あり
美目清兮　美目　清あり
儀既成兮　儀　既に成りぬ
終日射侯　終日　侯を射るに
不出正兮　正より出ださず
展我甥兮　展に我が甥なり

［第二章］

猗嗟孌兮　猗嗟　孌たり

清揚婉兮　清揚　婉たり
舞則選兮　舞するときは則ち選ほれり
射則貫兮　射するときは則ち貫たる
四矢反兮　四矢　反す　［卒章］
以禦亂兮　以て亂を禦ぐ

本詩全篇、魯の荘公の威風堂々たる姿、彼の卓越した弓の腕前に對する賛美に終始している。これについて、『正義』は次のように解説する。

魯の荘公の威儀技藝はかくのごとく素晴らしいが、その母が不義を行うのを防ぐことができず、淫亂な行いをさせてしまった。これこそが歎くべく傷むべきことである（威儀技藝、其美如此、而不能防閑其母、使之淫亂。是其可嗟傷也）　［首章］

魯の荘公の威儀武藝はかくのごとくであり、さらに齊の君主の甥でもある。しかし彼は母親に姦淫させないようにすることができず、人々に齊侯の息子だと思われていた。これこそが歎くべく傷むべきところである……荘公が齊侯の甥であることはまったくの眞實であるが、［「展に」と言い］絶對に眞實だと言っているのは、當時の人々が荘公が齊侯の息子だと言っているのを強く否定しているのである（威儀技藝如此、又實是齊之外甥。不能

使母不淫、令人以爲齊侯之子。是其可嗟傷也……爲齊之甥、信不虚矣、而云誠實是者、拒時人言是齊侯之子耳）

［第二章］

魯の荘公の威儀武藝はかくのごとくであるが、その母が不義を行うのを防ぐことができなかった。だから刺っているのである（威儀技藝如此、而不能防閑其母。故刺之）

［卒章］

各章『正義』に、「威儀技藝、其の美なること此の如し」「威儀技藝此の如し。又た實に是れ齊の外甥なり」「威儀技藝此の如し」と言うのは、詩句が魯の荘公を賛美するのを簡潔に要約したものである。と言うことは、それ以下の文はすべて詩句に詠われた内容ではなく、詩人が言いたかったが言わなかった事柄を推測したものということになる。疏家は、詩で歌われている内容は詩人が本當に傳えたかったことではなく、それは詩句の裏に隠されていると考えている。「言外の意」という語は用いていないけれども、實質的には「言外の意」の考え方を用いて解釋している。

北宋・蘇轍の『詩集傳』（以下、『蘇傳』と略稱）は『正義』の解釋を踏襲して、本詩首章について次のように言う。

齊の人々は、魯の荘公が無駄に優れた威儀武藝を持っているけれども、自分の母親が亂れた行いをするのを止めることができなかったことを傷んだ（齊人傷魯莊公徒有威儀技藝之好、而不能止其母之亂也）

南宋・朱熹『集傳』も首章について、

齊の人々は口を極めて魯の莊公の威儀武藝の素晴らしさがこれほどまでであると言う。そのように美めることによって彼が禮に従って、自分の母が不義を犯すのを防ぐことができなかったことを刺っている。「惜しいかな、ただこれだけが缺けている」と言っているようなものである（齊人極道魯莊公威儀武藝之美如此。所以刺其不能以禮防閑其母。若曰惜乎其獨少此耳）

と言い、『正義』の解釋を踏襲している。「言外の意」という術語こそ用いてはいないものの、「猗嗟」の詩から「言外の意」を讀み取って解釋することは古くから行われていたことがわかる。

なぜこのように解釋することが必要だったのであろうか。「猗嗟」『正義』の中で、詩句に現れない詩人の意として說明されている部分を見ると、「其の母を防閑する能はず」「人をして齊侯の子と以爲（おも）は令（し）む」は、小序の「禮を以て其の母を防閑する能はず、子の道を失ふ。人以爲らく齊侯の子なりと」に對應している。疏家が讀み取った本詩の「言外の意」とは、小序に說明された内容であることがわかる。つまり、疏家が本詩には詩句に表現されない詩人の眞意が存在すると考えたのは、小序に従って詩句を解釋するためだったのである。

蘇轍は、小序の初句（「首序」とも呼ばれる）と第二句以下（「後序」とも呼ばれる）とが成り立ちが異なり、初句のみを由來正しく尊重すべきものとしたことで知られる。本詩小序の「禮を以て其の母を防閑する能はず……」は第二句以下に當たり、彼にとっては本來従う必要のない部分である。にもかかわらずこれに従っているのは、魯の莊公を贊美する詩句を小序初句の「魯の莊公を刺る」の意味に轉換するためには、第二句以下の情報を用いる必要があったからと考えられる。

朱熹は小序に對する批判的態度を尖鋭化し、自身の注釋書から小序を排除した。その朱熹でさえも本詩については、「詩序辨說」（以下「辨說」と略稱）で「本詩の小序は當を得ている（此序得之）」と言い、異論を唱えなかった。これも贊美の内容に終始した詩篇から詩經が持っているはずの道德的意義を讀み取るためには、小序に從わざるを得なかったからであろう。

このように、「言外の意」が小序と詩篇の照應關係を確保するため、より本質的に言えば、詩篇の内容から道德的教訓を導き出すために必要だったという黄忠愼氏の指摘は、嚴粲の「言外の意」說に言えるだけではなく、詩經學史全體に廣く當て嵌まるものである。詩經解釋が經學の一環として行われるかぎり、「言外の意」的發想は常に要求されるのであり、故に、小序を排斥し「詩句に忠實に詩篇を解釋する（以詩解詩）」態度を主張した朱熹であっても、詩句自體から道德的教訓を明示的に讀み取れない場合は、「言外の意」的發想を用いないわけにはいかなかったのである（このことと彼の淫詩說との關係については後に考察したい）。

したがって、「言外の意」という概念が詩經解釋に用いられること自體は自然なことである。問題とすべきは、歷代の詩經學者たちが、「言外の意」的發想を詩篇を解釋するためにどの程度重要なものと考えたかということである。

『蘇傳』は卒章について、

君子にとって射藝とはいったい何に用いるためのものであろうか。また亂を防ぐために他ならない。ところが今莊公の射藝は無駄に技術を誇るものでしかない（君子之於射也將安用之。亦以禦亂焉耳。今莊公徒以爲技而已）

と言い、荘公の武藝が本來の目的を失った上邊の飾り、實際の役に立たない技藝に過ぎないと言っていると解釋する。本詩卒章の「以禦亂兮」を「以て亂を禦がんや（荘公の射藝によってどうして亂を防ぐことができようか、できるはずがない）」と反語でとっていることがわかる。この解釋に據れば、詩人の荘公に對する批判は詩句に明示的に表現されていて、「言外の意」はないことになる。蘇轍は、「言外の意」を本詩全體を支配する修辭と認識していないのである。

これに關して、南宋・呂祖謙はその『呂氏家塾讀詩記』（以下、『呂記』と略稱）本詩卒章の注に次のように言う。

つまり、〔卒章は〕荘公の弓矢の精妙なことは、それによって亂を防ぐことができるほどだと稱讃しているのである。そのことは彼が〔乘丘の役で〕金僕姑の矢を放って南宮長萬を射た故事[17]に表れている。ある學者の解釋では、詩人は荘公が〔弓の腕前を〕亂を防ぐために用いなければならないとするが、これは間違いである。本詩の批判の氣持ちはみな詩句の外にある。首章は彼の威儀技藝の素晴らしさを嘆じている。第二章はまた彼の威儀技藝が齊侯の甥たるにふさわしいと嘆じている。卒章はまた彼の威儀技藝がもって亂を防ぐことができるほどだと嘆じている。繰り返し繰り返し嗟嘆しているところから、荘公の大いに缺けているものが言わずともわかるのである（蓋稱荘公弓矢之精、可以禦亂。觀其以金僕姑射南宮長萬則可見矣。說者或謂詩人諷荘公當用以禦亂、非也。是詩譏刺之意皆在章外。一章嘆其威儀技藝之美也。二章復歎其威儀技藝宜爲我甥也。三章復歎其威儀技藝可以禦亂也。嗟嘆再三、而荘公所大闕者不言可見矣）

呂祖謙が言う「意は……章外に在り」とは「意は言外に在り」と同意であろう[18]。彼は、本詩卒章には「譏刺」の思いを直接表現する語句はなく、それは言外に隠されていると考える。とすれば、彼が批判する「説者」は、呂祖謙とは反對に、詩句に直接「譏刺」が表現されていると考えていたことになる。つまり、莊公の優れた射技は「當に亂に用ふべき」であるのに、實際には亂を治めるためには用いていないと、「説者」は解釋していることになる。これは蘇轍の説に合致する。すなわち、呂祖謙は蘇轍が「言外の意」による解釋を徹底させていないと考え、その不徹底さを批判していると理解できる。

ところで、「猗嗟」はこれまで見てきたように、小序と詩篇との間に懸隔が存在する——小序は魯の莊公を刺る詩と言うのに、詩は魯の莊公の威儀技藝を賛美している——以外にも、さらに別の懸隔も内包している。

それは、詩經の中で本詩が置かれた位置と、小序および詩篇との間に存在する懸隔である。本詩は齊風の一篇である。ところが小序に據れば、本詩は魯の莊公を刺っている。齊風の一篇ならば、齊國の君主（襄公）を刺る詩であるのが自然なのに、小序に魯の莊公を刺る詩と言い、詩句も魯の莊公を歌うことに終始し、歌われて當然である齊の襄公に對する批判が見られない。齊風になぜ他國の君主を刺った詩が編入されているのだろうか。この疑問に對しては、本詩が齊の人によって作られたからと答えることができなくはない。しかし、それではなぜ齊國の詩人がわざわざ他國の君主を刺らねばならないのかという疑問が生じる。刺詩は典型的には自國の君主の惡事を刺り、その反省を促すために作られたとされる。他國の君主を刺っても本人に聞かせることはできず、その改心を期待できない。これではいたずらな批判に終わるのではないだろうか。ここに第二の懸隔が存在しているのである。

本詩小序の『正義』は、

魯の莊公の母親〔文姜〕が齊の襄侯と密通したのを見て、莊公が襄侯の落とし胤だと思った．これはこの上なく恥ずべきことである。だから、齊人はこの詩を作って刺ったのである……本詩は齊人が作ったものであるから、齊風に編入した。襄侯が魯の莊公の母と密通したので、襄侯の詩とした（見其母與齊淫、謂爲齊侯種胤。是其可恥之甚。故齊人作此詩以刺之也……以齊人所作、故繫之於齊。襄公淫之、故爲襄公之詩也）

と、不義の子と言われるのは人として恥ずべきこととして、魯の莊公がそのような風評を受けたことを刺っていると言う。本詩が齊の詩人に作られたから齊風に編入されたと説明するだけで、文姜とともにこの醜聞の張本人であり、本來ならば魯の莊公以上に責められて當然の齊の襄侯については、「襄公之に淫す」とは言うもののそれ以上その罪悪を俎上に上せることなく、不問に付した形になっている。したがって、第二の懸隔を解消しているとは言えない。蘇轍、呂祖謙、朱熹もこの第二の懸隔を取り上げておらず、解決されないままに置かれている。

このように見ていくと、『正義』、蘇轍、朱熹いずれも「言外の意」的發想を解釋に用いてはいるものの、それを解釋概念として明確化していない。したがって、これらはあくまで前史として位置付けられるべきである。[19]『呂記』は「言外の意」に當たる術語を解釋に用いており、これを一つの解釋概念として認識していることがわかるが、いまだ不徹底な點が殘る。

3　配慮とコミュニケーションのための「言外の意」

前節で指摘した「猗嗟」が内包する二重の懸隔を、嚴粲はどのように處理しているであろうか。首章『詩緝』に次

のように言う。

齊人は、この莊公の容貌がはなはだ立派で意氣盛んであるのを傷み歎いている……威儀武藝は本來稱讃すべき事柄であるはずなのに、それを傷み歎きながら歌っているのは何かしら不滿なところがあるからであるが、それは何なのだろうか。これは、莊公の威儀武藝の素晴らしさには何一つ缺けることがないのだが、惜しむべきことが實は存在するのだと言っているようなものである。彼の母親文姜の〔淫亂な振る舞いの〕ことは、思うに言うに言われぬものがある。首章ではその氣持を「猗嗟（ああ）」という感嘆詞にわずかに寓するのみで、にわかには言おうとしないのである（齊人傷歎此莊公之貌甚昌而盛壯矣……威儀技藝本是可美之事、而傷歎言之、有所不滿何也。若曰莊公威儀技藝之美、無一欠闕、所可惜者蓋有在矣。文姜之事、蓋難言之。首章微寓其意於猗嗟之辭而未遽言之也）

これを見ると、第一の懸隔――小序は魯の莊公を刺る詩と言うのに、詩は魯の莊公の威儀武藝を贊美する内容を持つ――については、從來の解釋を踏襲していると言うことができる。

ただし、「猗嗟（ああ）」という語が讀者の違和感を誘發すること、それを作者が意圖してさりげなく插入していることに注意している點は、從來の說から一步踏み出し、「言外の意」が機能する仕組みについて關心を持っていることを表している。

それでは、もう一つの懸隔――本詩は齊風に編入されている以上、齊國の君主（襄侯）を刺る詩であるはずなのに、

小序は魯の荘公を刺る詩と言い、詩も魯の荘公を歌うことに終始している――はどうであろうか。『正義』が棚上げしたこの問題を、嚴粲はどのように捉えているであろうか。小序『詩緝』に次のように言う。

文姜の事件に關しては、齊の襄侯こそが罪悪の張本人である。それなのに、齊風「南山」詩では咎を〔文姜の夫である〕魯の桓公に歸し、「敝笱」でもさらに魯の桓公が自分の妻が不義を行うのを防ぐことができなかったと刺る。[20]「猗嗟」ではさらに〔文姜の子の〕魯の荘公が自分の母の不義を防げなかったと刺っている。このように三詩はいずれも〔襄侯ではなく〕他人に咎を歸している。これは恐らく、自分の君主の悪事を名指しで言い表すに忍びなかったのであり、齊國の臣民としての感情故のことである（文姜之事、齊襄大惡也。南山既歸咎於魯桓、敝笱又刺魯桓不能防閑其妻。猗嗟又刺魯莊不能防閑其母。皆歸咎於他人。蓋不忍斥言其君之惡者、齊臣子之情也）

詩人は、自分の主君、齊の襄侯こそが眞に刺るべき相手であることをはっきり理解している。しかし、自分の君主を正面から批判することは臣下たる者としてできかねた。故に、間接的な關係者である魯の荘公を批判の的にしたのだ。詩人は自分の君主に對する配慮から發して、眞の批判の思いを言外に潜め、詩の表面上は他人に罪悪を押し付けたのだ――嚴粲はこのように說明する。彼は、齊人が作った詩である以上、齊の君主に對する批判が込められているはずなのに、小序にも詩句にもそれが見られないという矛盾から、作者の自分の主君に對する配慮を讀み取り、言外に込められている批判の氣持ちを見出している。『正義』に比べ、詩人の眞心により深く分け入り、二重の懸隔から

生まれる「言外の意」を合理的に説明しようとしていると言うことができる。

嚴粲はまた、表面には表さないのに、詩人が言外に込めた批判の思いを讀者が感受できるその仕掛けについても説明している。[21] 卒章『詩緝』に次のように言う。

> 變風の詩のスタイルとして、詩人の思いは言語の外にある。一詩全篇始めから終わりまですべて他の事柄についての言葉に託したものもある。一讀しただけでは、何を言おうとしているのか雲を摑むようでわからない。しかしその中にこっそりと一、二語を插入して、これこれこういうことだと自然に人に悟らせる。本詩ではその人（魯莊公）の容貌、威儀、技藝の素晴らしさを筆を極めて描寫しているというのに〔「猗嗟（ああ）」という〕歎息の語を發している。ここからこの人の足らないところは、必ずや容貌、威儀、技藝の外にあるのだろうと讀み取れる。まさにこの時、本詩を齊の地で採集したその時、いまだ小序の說はなかったので、誰を刺っているのか何を詠っているのかわからなかっただろう。しかし詩の中に「展（まこと）に我が甥なり」の句があり、その「甥」というただの一語から、魯の莊公を刺っていることが明らかになる。「展（まこと）」というただの一字から、人々が魯の莊公を齊侯の隱し子だと思っていることが明らかになる。詩人は詩に詠っている人物の名譽を守るために眞相を忌み隱した言葉を假構してそれによって刺っているのである。讀者がそのような詩人の意圖を感得して、その上でもう一度本詩を諷詠したならば、冒頭の「猗嗟（ああ）」の句以下、句ごとに美め稱えているところそれぞれすべてに、歎息して不滿に思う氣持ちが込められていることが理解できる。切迫した言葉遣いはしていないけれども、そこには深く切實な思いが込められている（變風之體、意在言外。有全篇首尾皆託之他辭、乍讀之、茫然不覺所謂。但中閒冷下一

二語、自然使人默會。如此詩極言其人容貌威儀技藝之美、而以歎息之辭發之。是其人所不足者、必有在於容貌威儀技藝之外矣。方此時、採得於齊、未有序說、不知所刺何人、所言何事。中間有展我甥兮一句、只一甥字、便見得是刺魯莊公。只一展字、便見得是人以魯莊爲齊侯之子。詩人設爲諱護之辭以譏之。讀者旣默會其意、乃再諷詠之、方見得自猗嗟而下、句句稱美處、節節是歎息不滿處。辭不急迫而意深切矣）

詩人は詩篇の中に全體的内容とは異質の言葉を一、二語忍ばせることで、讀者の違和感を惹起し、そこから詩人の祕めた本當の思いを感得させるのだと、嚴粲は言う。本詩で言えば、各章冒頭の「猗嗟（ああ）」の語、第二章「展（まこと）に我が甥なり」の句がそれに當たる。

この内、「猗嗟（ああ）」の語については前述した。『正義』[22]『蘇傳』『集傳』いずれも毛傳の「猗嗟、歎辭」の訓釋を承け、この語が詩全體の贊美の基調と異質の感情を表していて、詩人の「言外の意」を露呈する語とは認識している。しかし三者はいずれも、詩人の感情が半ば無意識の内に表白されたものと捉えていたと考えるのが妥當であり、「微かに其の意を『猗嗟（ああ）』の辭に寓す」と言い、詩人がその効果を計算して意識的に插入した語であると考える嚴粲とは距離がある。

先人と嚴粲との意識の違いは、嚴粲が「展（まこと）に我が甥なり」を言外の意と關わる語であると捉えるところにより鮮明に表れる。嚴粲の思路を推測すれば次のようになるだろう――讀者は、「猗嗟（ああ）」という感嘆詞を見て、本詩が單純な贊美の詩ではないことを漠然と感じ取る。ただし、それでは詩人が誰の何を歎いているのかということは、これだけでは明らかではない。ところが、そこに「展（まこと）に我が甥なり」というもう一つの鍵になる語句が加わる。齊の襄侯の妹

文姜の生んだ魯の莊公が襄侯の「甥」であるというわかりきったことを、詩人はわざわざ「展（まこと）に」と強調して述べることで、讀者に詩人の隱された意圖が存在することに改めて氣付かせ、それによって、詩の表面から祕め隱されていた襄侯の惡德にも自ずから批判の光が照射されることになる。そしてそれに氣付いた讀者が再度詩を讀み直すと、詩人の言わんとしていることがはっきりと理解される。そのような二重の仕掛けを詩人は仕込んでいるのである——と。

ここから、本詩の「言外の意」が詩人の意識的な修辭技法であり、そしてそれは詩人の方法意識に支えられたものであると、嚴粲がはっきり考えていることがわかる。詩人から讀者へと「言外の意」が傳達されるメカニズムを說明する點で、「言外の意」の解釋システムをより總合的、理論的に考察している。ここに、嚴粲の「言外の意」に對する認識の、先人のそれと明確に異なる獨自性を認めることができる。嚴粲は「言外の意」を詩經解釋に本格的に導入した學者と言うことができる。

＊＊＊　＊＊＊

右の考察を踏まえ、別の詩によって嚴粲の「言外の意」認識の特徵をさらに深く見ていきたい。鄘風「君子偕老」小序に次のように言う。

「君子偕老」は、衞の〔宣公〕の夫人〔で惠公の母でありながら、義理の息子公子頑（がん）と通じた宣姜〕を刺った詩である。夫人は淫亂で、夫に仕える道を失った。故に國君の夫人[23]の德、服飾の盛んなる樣を陳述し、そのようであってこそ君子と人生を共にするにふさわしいことを言う（君子偕老、刺衞夫人也。夫人淫亂、失事君子之道。

故陳人君之德、服飾之盛、宜與君子偕老也）

小序にも觸れられているように、本詩全三章は、基本的に國君の夫人の服飾容貌の素晴らしさを贊美する詩句が連ねられる。例として首章を擧げよう。

君子偕老　君子　偕に老ゆ
副笄六珈　副し笄し六珈す
委委佗佗　委委佗佗たり
如山如河　山の如く河の如し
象服是宜　象服　是れ宜し
子之不淑　子が淑からざる
云如之何　云に如何せん

このような詩がどうして「淫亂」で「君子に事ふるの道を失」った「衞の夫人を刺る」ために作られたということになるのか、これが本詩解釋の重要な問題となる。これについて、嚴粲はどのように考えているであろうか。

本詩は、ただ夫人の服飾の盛んな様、容貌の尊い様を述べるだけで、彼女の淫亂な行いには言い及ばない。し

かし詩中に「子が淑からざる」という一句があり、そこに批判の思いはすべて現れている。衞風「碩人」の詩はただ荘姜の美しさのみを述べ、荘公が彼女を禮義に則って迎えなかったことは言わないけれど、しかし詩中に「大夫夙く退け〔、君をして勞れ使むる無かれ〕」という二語がある。[24]「猗嗟」の詩はただ魯の荘公の素晴らしさを述べ、彼がその母が不義を犯すのを防げなかったことは言わないけれど、しかし詩中に「展に我が甥なり」という一語がある。これら三篇の詩はみな同じスタイルである。いずれも詩中に思いがけない語句を一つ二つ忍ばせながら、詩人の意圖は終始露わにしていない（此詩惟述夫人服飾之盛、容貌之尊、不及淫亂之事。但中間有子之不淑一言、而譏刺之意盡見。碩人惟述莊姜之美、不言莊公不見答、但中間有大夫夙退二語、猗嗟惟述魯莊之美、不言不能防閑其母、但中間有展我甥兮一語。三詩體同。皆中間冷下一二語、而首尾不露其意也）

（「君子偕老」小序『詩緝』）

嚴粲は言う――本詩は衞の宣姜の美しい姿を賛美するのに終始していて、その淫亂を直接的に刺る詩句はない。ただ、詩人は「子が淑からざる」という句を紛れ込ませた。本詩の全體に滿ちわたる賛美の表現とは、まったく性格の異なるこの語句に讀者はおのずから目を引き付けられる。そこから詩の表面上の賛美がかりそめのものであることに氣付き、その裏の辛辣な批判の思いを感得するに至る――と。詩人は故意に自分の眞意とは異なる表現をするが、そこに詩全體の基調とはミスマッチの語または句をさりげなく忍び込ませ、それが鍵となって詩人の本當の思いが讀者に傳わる、そのような仕掛けを施す作詩法を用いている、と嚴粲は考える。平穩な風景の中に、一つだけ毛色の違う物が混じっていて、それに目を留め違和感を感じた途端、風景はもと感じられていた平穩な雰圍氣を喪失し、禍々し

い相貌をもって現前する、そのような映像表現にも似た修辞法を、嚴粲は本詩と衞風「碩人」、そして齊風「猗嗟」の中に見出しているのである。

嚴粲の「君子偕老」解釋には、「猗嗟」解釋には見られない要素がある。それは、批判の對象と意思疏通するために本詩が作られたという認識である。首章『詩緝』に次のように言う。

今、お前宣姜は間違った行爲をしでかし、夫婦仲良く生涯を送る道を失ってしまった。こういうことでは、このような服飾の豪華さはいったい何になるだろうか。お前にふさわしいか、ふさわしくないか。このように問うて、恥を知らしめようとしているのである（今爾宣姜之爲不善、失偕老之道、則於此服飾之盛爲如何乎。宜乎不宜乎。問之、使自愧也）

「之に問ひて、自ら愧ぢ使む」と言い、嚴粲は、詩人が宣姜に向けて詰問し、その廉恥心を喚起しようとしていると解釋する。第二章「胡ぞ然く天の而きや」「胡ぞ然く帝の而きや」という、宣姜の美しさを驚き訝しむ疑問の句について、『詩緝』に次のように言う。

彼女の服飾の豪華さ、容貌の美しさは、これを眺めればまさに天女に見まごうばかりであるが、これはいったい何のためにあるのかと言う。故意に[28]〔「胡ぞ然く天の而きや、胡ぞ然く帝の而きや」という〕問いかけの言葉の形をとり、宣姜に自ら反省させようとしたのである。このような尊く氣高い服飾容貌を持ちながら、よろしか

らぬ行いをすることがどうして許されようか（言其服飾之盛、容貌之美、望之猶天人然。是何爲如此也。設爲問辭、令宣姜自省思之。豈可以如是尊嚴之服飾容貌、而爲不淑之行乎）

「問辭を設け爲し、宣姜をして自ら之を省思せ令む」と言い、宣姜に外見にふさわしからぬ自分の不道徳な振る舞いを反省させようとしていると解釋する[26]。詩人が宣姜に反省を促す目的で、彼女に向き合って刺っていると、嚴粲は考えている[27]。

このように本詩は、宣姜という具體的な對象に向かって、その罪惡を自覺させ、不道德な行いを止めさせるために說得するという明確な目的意識を持って作られたものだと嚴粲は考えている。「言外の意」の修辭表現も、この目的に寄與する。宣姜の氣持ちに配慮し、詩人の言葉が受け入れやすくするように全體としては彼女を贊美する言葉を連ねながら、急所に彼女に對する自分の不滿を暗示する言葉を織り交ぜた。「言外の意」は、詩人と宣姜との意思疏通を圓滑に行い、彼女を善導するための工夫の一環として機能するのである。

あるいは、本詩が宣姜を刺る詩である以上、コミュニケーション性を持っていることは當然のことではないか、現に首章に「子の淑からざる」と第二人稱が用いられているではないかという反論が出るだろう。しかし、實際には歷代の解釋においてコミュニケーション性が自然に讀み取られているわけでなかった。そのよい例が鄭箋である。首章鄭箋に、

お前はその服飾こそこんなにも美しいが、よからぬ行いをしでかしている。これは禮に照らしてどう考えるべ

きか。〔このように言うのは〕宣姜を深く憎んでいるのである（子乃服飾如是、而爲不善之行。於禮當如之何。深疾之）

と言い、卒章鄭箋に、

宣姜がこのような豪華な服を着ていながら、淫らで愚かな行爲で國を亂しているのを憎んだが故に、このように歌うのである（疾宣姜有此盛服而以淫昏亂國、故云然）

と言う。鄭玄は、詩人の宣姜に對する感情を「疾む」という語で表現している。ここには、宣姜の道德的覺醒を促すために意思疏通を圖ろうとする詩人の姿は見られない。むしろ、宣姜を一方的に嫌惡し善惡の基準で切り捨てようとする態度を、鄭玄は見出している。

朱熹も、「今宣姜の不善なること乃ち此の如し。是の服有りと雖も、亦た將た之を如何せん哉。稱はざるを言ふ（今宣姜之不善乃如此。雖有是服、亦將如之何哉。言不稱也）」（首章『集傳』）「其の徒だに美色有りて人君たるの德無きを見す（見其徒有美色而無人君之德也）」（卒章『集傳』）と言うように、詩人が宣姜を善惡の基準から評價していると解釋していて、彼が宣姜との意思疏通を圖っているという認識は見出せない。

嚴粲の認識のあるいは先導者となったのではないかと思われるのは、呂祖謙の解釋である。卒章『呂記』に次のように言う。

首章末に「子の淑からざる、云に如何せん」と言うのは、宣姜を責めているのである。第二章末に「胡然として天なり、胡然として帝なり」と言うのは、宣姜に問うているのである。卒章末に「展に之の如き人、邦の媛なり」と言うのは、宣姜を惜しんでいるのである。表現は次第に婉曲になっていき、思いは次第に深くなっている

（一章之末、子之不淑、云如之何、責之也。二章之末云、胡然而天也。胡然而帝也、問之也。三章之末云、展如之人兮、邦之媛也、惜之也。辭益婉而意益深矣）

二章『呂記』の「之に問ふ」は、『詩緝』の「設けて問辭を爲す」に、卒章『呂記』の「之を惜しむ」は『詩緝』に「歎惜不滿の意」と言うのに重なる。これから考えると、嚴粲の解釋は呂祖謙の影響を受けている可能性がある。[28] ただし、『呂記』では詩人が宣姜に向けて意思疏通を圖ろうと努めているという理解は、いまだそれほど明確ではない。それは特に首章『呂記』では「之を責む」としているのに對して、『詩緝』では「之に問ひて、自ら愧ぢ使むるなり」としているところに表れている。『呂記』では、詩人が宣姜に一方的に言い募り斷罪していると解釋するのに對して、『詩緝』の解釋では粘り強く相手の反省を待つ印象がある。

『詩緝』における「言外」の語の所在の大多數は國風が占めている。[29] 黄忠愼氏が指摘するように、嚴粲は「意は言外に在り」が國風に特徴的なスタイルであると考えていた。このことは、「毛詩大序」の、「政小大有り、故に小雅有り、大雅有り（政有小大、故有小雅焉、有大雅焉）」について、『詩緝』に、

思うに優しく柔らかで事柄の奥襞に分け入り、思いは言葉の外にあるというのは、風のスタイルである（蓋優

柔委曲、意在言外者、風之體也）

と言うところにも表れている。[30]

彼は、國風の詩の作者を指す「風人」という語をしばしば用いるが、[31]その用例を見ると「言外」およびその類語とともに現れることが多い。例えば、周南「螽斯」『詩緝』に次のように言う。

本詩の思いは、すべて「宜爾」二字に込められている。風人の意は言外にある。彼は、后妃の子孫がおおぜいなのを見て、このようであるのは當たり前だとただそれだけ言い、人々にその當たり前である理由はいったいなに故なのかを考えさせ、明確に答えを言わない。嫉妬しないが故にこのような〔子孫繁榮の〕狀態をもたらしたのである（此詩之意全在宜爾二字。風人意在言外。見后妃子孫衆多。但言宜其如此。使人自思其所以宜者何故而不明言之。謂由不妬忌而致此也）

本例で嚴粲は、詩人が讀者が自發的に思考を巡らすよう仕向けるために、眞に傳えたいことを意識的に言わないで殘したと考えている。「君子偕老」「猗嗟」において詩句表現と詩人の眞意が逆方向であったとは異なり、本例では詩句表現と詩人の眞意との間に屈折はないが、やはり、詩人が修辭的效果を考えて傳えたい内容を敢えて言わず、ただ鍵となる「宜（むべ）なり爾（なんじ）」を忍び込ませ、詩人の眞意の存在をほのめかしていると嚴粲は考える。[32]そしてその鍵によって明らかになる詩人の眞意「妬忌せざるに由りて此を致す」は、まさしく「螽斯」序に、「螽斯の若く妬忌せざれば則

ち子孫衆多なるを言ふなり」を承けたもので、本詩の「言外の意」も、小序と詩文との懸隔を繋ぐものとして考えられていることがわかる。

このような例に見られる嚴粲の解釋に據れば、詩人の心は詩を歌って聞かせる相手、あるいは讀者に向かって開かれている。「言外の意」と配慮・コミュニケーション性とを結びつけていること、またそのための具體的な仕掛けを見出している點で、嚴粲の「言外の意」認識は獨自性を持っている。

4　嚴粲の「言外の意」に對するもう一つの認識

前節では、嚴粲が「言外の意」を、讀者に印象的に自分の眞意を傳えるための意識的な修辭表現と考えていた様子を見た。しかし『詩緝』の中には、これとはやや性格を異にするのではないかと思われる「言外の意」もある。邶風「燕燕」首章『詩緝』に言う。

> 風人は盡きせぬ思いを胸に祕めているが、本詩はただ離別の恨みだけを敍述しており、息子が弑殺され國が危機に瀕していることに對する憂えは、みなひっそりと表現されない内に込められている（風人含不盡之意。此但敍離別之恨、而子弑國危之戚、皆隱然在不言之中矣）

「隱然として言はざるの中に在り」とは、「言外の意」に當たるだろう。嚴粲は、詩人は止めようもなく湧き上がる思いを胸に抱いているのだが、その具體的内容は詩に表現されず心の内にひっそりと隱されていると言う。彼は、な

ぜ詩人が言わなかったと考えるのであろうか。

本詩小序『詩緝』は、朱熹の「莊姜作る」という注を引く。「莊姜」とは衛の莊公の夫人である。小序とその鄭箋に據れば、衛の莊姜には子供がなかったが、彼女と仲の良かった莊公の妾戴嬀（たいき）が生んだ公子完（かん）を自分の息子として可愛がっていた。莊公の死後、完が後を繼いだが、莊公の庶子の州吁（しゅうく）の手にかかって殺されてしまった。完の死後、實母の戴嬀は實家に戻されることになった。莊姜は彼女を遠くまで見送り、自分の思いを表すために本詩を作ったと言う。すなわち、本詩は莊姜が今や別れようとする戴嬀に向けて歌われた詩であり、そこには同じ悲歎を味わう者同士の心の交流はあるだろうが、その「言外の意」はこれまで見てきた詩篇のような、自分の眞意を隱蔽しつつそれとなく傳えるという、意識的な修辭とは考えられていないだろう。むしろ、莊姜の心の中に思いが鬱積して、彼女自身もそれを言語に表現し盡くせないという狀況のもとで「言外の意」が生まれたということになるのではないだろうか。

もう一つの例を擧げよう。衞風「河廣」首章『詩緝』に次のように言う。

> 夫人は義として宋國には行くことができなかった。が、彼女は虛構して、ある人が宋國は遠いから行ってはいけないと自分が歸るのを邪魔したとして歌ったのである。このように言葉に表現することによって、心の結ぼれをほぐそうとしているのである（夫人義不可以往宋、而設爲或人以遠沮己已。爲辭以解之）

嚴粲は、本詩を宋の襄公の母親が作った詩と考えている。彼女は衞の出身で宋の桓公に嫁ぎ、後の襄公を生んだが、離緣され衞に歸された。その後、息子の襄公が卽位し、彼女は息子に會いたい思いが募ったが、離緣された夫人は二

度とその地に戻ることはできないという禮の規定に縛られていたために叶わぬ思いを晴らそうとして、本詩を作ったと言う。つまり、嚴粲は本詩を宋の襄公の母親の獨白の詩と取り、誰かに自分の氣持ちを傳えようというコミュニケーション性は想定していない。嚴粲はまた次のように言う。

宋國に行きたいという思いが切實なので、宋國への道のりが遠いのにそれを近いと言う。本當に行こうとしているかのように言うのである。子供を思う氣持ちが詩句の外にひっそりと込められている（欲往之切、故謂遠爲近。若眞欲往宋者。思子之情隱然於言外矣）

襄公の母は、子を思う情を意圖して隱蔽しているわけではなく、思いが心に渦巻いて言葉には言い表せないほどである。こうした狀況について、嚴粲は「言外に隱然たり」と言っている。この二例からわかるように、嚴粲の「言外の意」には、前節で見た意識的な修辭表現の他に、詩人の感情の深さの現れ、表現しようとしても言葉にならない思いという性格も見られるのである。

二種類の「言外の意」認識は、まったく別個のものとして竝立しているのだろうか。これまで見たように修辭性を持った「言外の意」についても、それが生まれるのは、心的交流をスムーズに行いたい、または相手に悟らせたいという、配慮・關心という心的狀態から生まれるものであると、嚴粲は考えている。詩人は自分の思いを一方的に表現して滿足するのではなく、それを相手に理解してもらいたいという意欲を抱き、そのために相手の心情に配慮し、また効果的に傳えるために修辭的技法を用いるのである。そこには、何がなぜ隱されているかという内容に對する關心

だけだけではなく、隠すという選擇をするに到った、詩人の心性や置かれた狀況を含めて詩を味わおうとする態度が見られる。言い換えれば、彼は、眞意を隠すところに詩人の人柄、およびその感情を讀み取っている。このように考えれば、修辭性に着目した「言外の意」も、詩人の人間に對する思いの深さの表れとしてあり、この點で二種類の「言外の意」認識は結びつく。

嚴粲は、毛詩大序の「言ふ者は罪無し、聞く者は以て戒むるに足れり」にコミュニケーション性を見出したが、これによって、思いやり深い詩人という理解が生まれた。これは、彼の「優柔委曲」という風人認識と親和的な人間像である。このことから、嚴粲の詩經學の中で二種類の「言外の意」――效果的な傳達という目的意識を持った修辭技法としての「言外の意」と、傳達を目的としない、詩人の思いの深さの自然な現れとしての「言外の意」――が融和しつつ存在することとなったのではないだろうか。

5　自然に滲み出るものとしての「言外の意」

筆者は以前、清朝考證學を代表する戴震が、その若年の詩經注釋書『戴補傳』の中で、嚴粲の「言外の意」論を引用し、さらに嚴粲の「言外の意」認識を獨自の詩篇解釋に應用している様子を考察した[33]。「言外の意」を詩人の意圖的修辭技法であるとし、そのコミュニケーション性を重視した嚴粲の說が、清朝に至るまで長く影響力を持ち續けたことがわかる。

その一方で筆者は、戴震の同時代の學者である翁方綱の詩經研究書『詩附記』を檢討し、翁方綱が嚴粲の「言外の意」認識に批判的だったことも考察した[34]。翁方綱は、詩經の詩篇は理屈によって說明しきれないものを孕んでいる、

分析的に解讀できない曖昧で渾然一體としたところ（翁方綱の言葉で言えば「渾」「渾括」）にこそ詩の本質があるという認識を強く持っていて、そのような視點から、嚴粲の解釋は過度に理屈に固執した（翁方綱の言葉で言えば「泥」）ものと捉えられたのである。[35] 嚴粲の「言外の意」說は、繼承者とともに眞っ正面からの批判者も持ったのである。

このような翁方綱の嚴粲批判は、嚴粲にとってまったく異なる認識から生み出されたのであろうか。この問題を考えるために、本節では、「言外の意」說が元明の詩經學者によってどのように展開されたかを見ていきたい。

明・鍾惺『批點詩經』は、「猗嗟」に次のような眉批を付けている。

> 魯の莊公の優れた點を歌いながら、每章每章「猗嗟（ああ）」の二文字を付け加えているところに、どれほどの惜しいと思う氣持ちが込められていることか（道他好處、却章章著猗嗟二字、多少感惜）

本詩が全體としては魯の莊公を贊美しているけれども、每章現れる「猗嗟（ああ）」という感歎詞が詩人の本當の氣持ちを傳えていると言う。「却って章章著く」と言うところから、鍾惺が「猗嗟（ああ）」を詩人が意識的に插入した言葉と捉えていたことが窺われる。詩句が表現しているのが詩人が本當に傳えたいことではないこと、しかし詩中に讀者がそれに氣がつくことによって詩人の隱れた本當の思いが明らかになる言葉を詩人が插入していること、これらには嚴粲の「言外の意」認識と相似た點が認められる。

しかし、鍾惺には「猗嗟（ああ）」が、詩人が讀者の讀解をコントロールしようという方法意識によって仕掛けた言葉であるという、嚴粲に見られた認識は稀薄である。むしろ彼は、詩人の抑えがたい「感惜」の情が「猗嗟（ああ）」の語を付け加

えずにはいられなかったと考えているようである。言い換えれば、鍾惺には詩人の言うに言われぬ混沌とした心理状態そのものを全體として受け入れ、そこから生まれる表現を味わう態度が見られる。讀者に對する効果を狙って仕掛けた措辭と讀み取らない點は、『正義』『蘇傳』『呂記』『集傳』に近い。

明末清初の賀貽孫の詩經注釋書『詩觸』は、「猗嗟」について次のように言う。

本詩にもし冒頭の「猗嗟（ああ）」の二字がなかったならば、「君子偕老」にもし「云に如何せん（云如之何）」の四字がなかったならば、兩詩はどちらも全篇贊嘆の言葉のみということになる。しかしながら、贊嘆の勢い餘ったところは、これすなわち不足を感じるところである。魯の莊公の威儀や技藝について言うならば、たいへんに素晴らしい。しかしその贊嘆の餘り餘ったところが彼に足りないところだというのは、心に了解されることである。「展（まこと）に我が甥なり」という言葉は、確かに「微詞」に屬するが[36]、しかしそれをことさらに穿鑿する必要はない。穿鑿したならば、うすらぼんやりしたものになってしまう。〔卒章の〕「以て亂を禦（ふせ）ぐ」という句についても、その「言外の意」はなにかと說明する必要はない。およそ詩人の素晴らしさというのは說明不能な所にこそある。それはこういうことだと說明できるものは、すべて「詩」ではない（此詩若無發首猗嗟二字、偕老篇若無云如之何四字、竟是一篇贊詞。然贊嘆有餘處、卽是不足處。若曰威儀技藝則旣美矣。言其有餘則其不足者可以意會也。展我甥兮、雖屬微詞、然不必鑿破。鑿則呆矣。以禦亂兮、言外之意、亦不必說出。大凡詩人妙處在不可說。其可說者皆非詩也）

「猗嗟」には、詩句に表現された賛美とは正反対の「言外の意」が存在すること、また、「君子偕老」を竝列して論じ、両詩がいずれも讀者に違和感を與える「猗嗟（ああ）」「云に如何せん」という語を持ち、それが詩人の本當の思いを明らかにするための鍵になっていることを説明しているのは、嚴粲と共通する。ただ、「贊嘆餘り有るの處は、卽ち是れ足らざる處」という賀貽孫の言葉からは、鍵となる言葉が詩人の作爲性に基づく意識的な修辭技法によって選ばれたという嚴粲のような認識は見られない。むしろ、自分の眞意を覆い隱そうとするのが過度になると、逆にそこから隱された眞意が漏れ出てしまうという説明には、鍾惺の認識に近いものが感じられる。

賀貽孫が「展（まこと）に我が甥なり」「以て亂を禦ぐ」という語に「言外の意」が存在することを認めながら、しかしそれを穿鑿することを否定しているのは注目される。彼が「言外の意」の内實を解析することを愼む態度を持っていることがわかるからである。これは、嚴粲の解釋態度とはまったく正反對のもので、それに對する眞っ向からの批判と言うことができる。

賀貽孫はなぜ、「言外の意」を穿鑿するのに反對するのであろうか。彼は、「鑿（うが）てば則ち呆」、穿鑿することによって詩篇が平凡でつまらないものになってしまうと言う。さらに、「其の說くべき者は皆な詩に非ざるなり」とも言う。明々白々にできるものの中には、詩の本質は存在しないと言っている。ここには、ポエジーは本質的に論理によって說明しきれないものであるという認識がある。彼にとって「言外の意」は說明しようとすべきものではないのであり、したがって彼が「以て意會すべし」というのも、意圖せずに自然に理解してしまうという、詩人と讀者との心理的な共鳴現象を言っていると捉えられる。

先述したように、翁方綱は詩篇の「渾」という性格を重視し、詩篇の本質は分析的な解釋によっては捉えられない

と考え、理屈に拘る解釋態度を「不必泥」と戒め、このような立場から嚴粲の「言外の意」認識に基づく解釋が「泥」であると言って批判した。翁方綱の認識は賀貽孫の說と極めて似ており、共通の解釋理念に基づいていると言うことができる。

と同時に、賀貽孫の解釋には嚴粲の「言外の意」說と共通する部分も見られた。彼に先立つ鍾惺の解釋にもやはり部分的にそれは見られた。この點にも注目しなければならない。彼らの「言外の意」說が嚴粲と結びつきを持っていること、嚴粲の影響を受けつつも獨自の發展を遂げることによって成立したものであることを暗示している。とすれば、賀貽孫と共通性を持つ翁方綱の「渾括」說も、嚴粲の「言外の意」說を批判する立場に立っているけれども、元を正せばその學的源流は嚴粲の言外の說に遡る可能性も考えられることになる。

嚴粲の「言外の意」說を繼承しつつも、それを獨自の認識に基づき變容させるという受容のあり方は、明末淸初を待つまでもなく、より早くから見られる。朱熹の『詩集傳』を遵奉する學者が多數を占めた元代の詩經學の代表的學者である劉瑾の『詩傳通釋』を例に擧げよう。彼は、鄘風「君子偕老」題下注において、「嚴氏曰」として、本詩首章の「子之不淑」の句が、詩人の「言外の意」を解き示す鍵になっているという說を引用した後で次のように言う。

私が考えるに、本詩三章はみな宣姜の服飾と容貌がこれほどまでに華やかに美しいことを言葉を盡くして歌っている。その言葉を玩味し、歌われている人を想像してみると、もし彼女がそれに叶う德を具えているならば、もちろん尊い樣子をして[37]、安樂榮華を樂しむにふさわしいと言えるだろう。しかし、かりにそれに叶う德を具えていなかったとしたら、〔彼女をこうまで贊美するのは〕淫らなことを敎え勸めるとさえ言えるのではないだろ

うか。ただ詩人は寛大で思いやり深い心を持ち、その思いは言葉に出さないところにあるので、だからその表現は本詩のようなものになるのである。思うに「猗嗟」の詩と同様のことである（愚按、三章皆極言宣姜服飾容貌之盛如此。玩其詞、想其人、有德以稱之、固足以尊其瞻視、享其安榮。苟無其德、不几於誨淫者乎。惟詩人寛厚、意在言外、故其立言如此。蓋與猗嗟之詩同意）

右の引用で、「蓋し『猗嗟』の詩と同意なり」と言う。「猗嗟」の題下注でも劉瑾はやはり『詩緝』の說を引用している。ここから、劉瑾の「言外の意」認識は、嚴粲に依據するところが大きいと考えられる。ただし、それは、嚴粲の「言外の意」說から出發しながらも、展開するにつれ嚴粲とは大きく異なっていく。彼の論には、詩人が眞意を意圖的に隱蔽しつつも、「言外の意」が存在することを讀者に暗示する鍵を埋め込んでいるという、嚴粲の說の重要な要素が見られない。すなわち、劉瑾は諷刺という觀點から「言外の意」を捉える立場から遠ざかっている。

劉瑾は本詩が「言外の意」を持つ所以を、詩人の「寛厚」という性格に求めている——詩人は、歌う對象の不道德を批判する氣持ちは心の内に持っているものけれども、寛厚な心を持つが故にそれをあからさまに表現することを善しとせず、對象の美點にもっぱら目を付けて歌う。詩人は對象の罪惡を讀者に知らしめようという意圖を持って詩を作ったわけではない。詩人は「淫を誨ふ」と誤解される危險を冒しても、對象の罪惡よりも美點を心を込めて歌うのである。讀者が「言外の意」を知るのは詩人の仕組んだ結果ではなく、むしろ詩人が祕め隱そうとした意思を裏切って、思いが溢れ出てしまったことによって、讀者に感得されるのである——このように劉瑾は言っている。このような「寛厚」とは、嚴粲の言う「優柔委曲」に近く、詩人の意圖した修辭技法としての「言外の意」とは異なる「言外

の意」に變質している。

このように見ると、劉瑾の「言外の意」に對する認識は相異なるものが混在している。そして、嚴粲とは異なる「言外の意」理解は、後の學者の說を導き出しているように思われる。

『批點詩經』は「君子偕老」に對して次のように言う。

［二章］神女賦

［卒章］本詩第二章と卒章は、ただ繰り返し彼女の美しさを讃歎しながら詠じているだけで、一切その「淑からざる」點を補い表現してはいない。古人の文章は含蓄が豊かで心境の複雜さが相照り映えて素晴らしい（後二章、只及覆歎咏其美、更不補出不淑。古人文章含蓄映帶之妙）

鍾惺は、本詩全體に贊美の詩句が連ねられている中で、首章の「子が淑からざる」だけが批判の氣持ちを表し、この一句が存在するために、本詩には贊美の中にその不道德さを惜しみ歎く思いが融け込むことになっていると言う。詩篇全體で表現されているのとは逆の作者の思いが、異質の語句によって浮かび上がる、これは、嚴粲の認識と同じである。

しかし、鍾惺はそれを「含蓄」や「映帶」という雰圍氣に關する語によって捉えている。これは、「子が淑からざる」の句によって、詩全體の明るい色調に微妙な陰影を與えているというような、心理の彩という側面から說明したものと考えられる。ここには嚴粲の、作者が故意にからくりを仕込み、隱蔽した眞意が明らかになるように工夫したとい

う説明にはない、詩の情趣の側面からのアプローチが見られる。

賀貽孫『詩觸』が本詩について、

本詩全體が一篇の「美人賦」である（全詩是一篇美人賦）

と言うのは、鍾惺の「神女賦」という眉批を受け繼いだものと考えられる。それに續けて、

ただ「子之不淑」の四文字に、やや詩人の刺る思いが露わになっている。これは、「猗嗟」が全篇讃歎の言葉であるのに、ただ「展我甥兮」の四文字だけに諷刺が込められているのと同様である（只子之不淑四字、稍露刺意耳。與猗嗟篇全首讃嘆、只展我甥兮四字寄諷同意）

と言うのは、嚴粲の說と共通する。ただ、彼には嚴粲の言うような、仕掛けとしての修辭という理解は薄いと思われる。

首章の「君子偕老」の句には詩人の批判的な思いが祕め隱された語がある。しかし、一種の感傷哀惜の意もあり、それは「云如之何」の四文字に詠歎のうちに表されている（首章君子偕老一句便有微詞、而一種感傷哀惜之意、則以云如之何四字咏嘆出之）

賀貽孫の注釋中に見える「微詞」という語は、朱熹が「猗嗟」『集傳』で「展に我が甥なり」の句に對して用いたもので、詩語の表面上の意味の裏に詩人の批判的な氣持ちが込められていることを言う語である。[38] この語を使うことによって、賀貽孫も「君子は〔淑やかな夫人と〕共白髪になるまで暮らす」という詩句の裏に、宣姜がそれにふさわしからぬ不道徳な行爲をしているという行爲をしたことへの批判を込めているととっており、朱熹から受け繼いだ解釋のしかたと言うことができる。

一方、「云に如何せん」の句に「感傷哀惜の意」を見出すのは、朱熹と異なっている。『集傳』では、

夫人は夫と人生を共に送るべき存在であるからこそ、その服飾はこのように豪華なのであり、ゆったりとして滿ち足り、安らかで重々しく廣やかな心を持ち、さらにまた彼女の着る象服にふさわしい身分なのである。ところが今、宣姜は善良ならざること何とこれほどまでである。このような服を持っていたとしても、いったいそれが何になろうかと言う。その身にふさわしくないと言っているのである（言夫人當與君子偕老、故其服飾之盛如此、而雍容自得。安重寛廣、又有以宜其象服。今宣姜之不善乃如此。雖有是服、亦將如之何哉。言不稱也）

と言い、「云に如何せん」を「これがいったい何になろうか」と、宣姜はお話にならないと見放し批判する意味で解釋している。それに對して、賀貽孫はこの句を批判ではなく、「これをいったいなんとしよう」と、詩人の詠歎が表現されたものとして讀み取る。宣姜の淑徳ならざる行爲を歎くとともに、その美しさを惜しむという詩人の感情の起伏が現れた語ととる點は、むしろ『批點詩經』の解釋に近い。

このように、彼の解釋の中には、朱熹・嚴粲・鍾惺三者の異質な認識が混合されている。「言外の意」に批判の修辭を讀み取るだけでは滿足せず、そこに込められた詩人の感情を汲み取ることに解釋の觀點がシフトしている。「言外の意」に、修辭技法の面からではなく、感情吐露の面からアプローチしようとしている。

以上の例は、嚴粲の「言外の意」說が、その後の詩經學者によって、他の學者の說と融合され受容され變容されながら發展した樣子を表している。そのような過程を經て清代に至り、戴震は嚴粲のオリジナルな說を受け入れ、一方、翁方綱は嚴粲の說が歷史的に變容したものを吸收し、自分の詩經學を作っていったという經路を考えることができるのではないだろうか。だとすれば、翁方綱「渾括」說には、元明の變容を經た嚴粲の「言外の意」を繼承する部分があるとも考えられる。換言すれば、翁方綱は、變容した嚴粲「言外の意」說をもって、オリジナルな嚴粲「言外の意」說を批判していると言うこともできるのではないだろうか。

6　斷章取義としての「言外の意」

朱熹は『集傳』の中で、「言外」という語をほとんど用いなかった[39]。これは、彼が「詩を以て詩を解す」――詩句に表現されたものから詩篇の意味を解釋する――という學問姿勢を持っていたことからすれば當然と言える。ところが、視野を擴げて彼の著述全體を見ると、「言外」の用例は十三例檢出でき、その數は相當多い[40]。もちろんその中には、「言外の意」認識を用いた經說を批判する用例も見られるが[41]、いずれにせよ詩經注釋以外の分野では決して「言外の意」に對して無關心であったわけでない。

ところで、朱熹「詩傳綱領」に、『論語』「學而」の、

子貢曰く、「貧なれども諂ふこと無く、富めども驕ること無きは何如」と。子曰く、「可なり。未だ貧にして學び、富みて禮を好む者に若かざるなり」と。子貢曰く、『詩』に云ふ、『切るが如く磋るが如く、琢つが如く磨くが如し』とは、其れ斯れを謂ふか」と。子曰く、「賜や、始めて與に詩を言ふべきのみ。諸に往を告げて來を知る者なり（子貢曰、貧而無諂、富而無驕、何如。子曰、可也。未若貧而學、富而好禮者也。子貢曰、詩云、如切如磋、如琢如磨、其斯之謂與。子曰、賜也、始可與言詩已矣。告諸往而知來者）

および、「八佾」の、

子夏曰く、「巧笑倩たり、美目盼たり、以て絢を爲す」とは、何の謂ひぞや」と。子曰く、「繪の事は素より後にす」と。曰く、「禮は後か」と。子曰く、「予を起こす者は商なり、始めて與に詩を言ふべきのみ」と（子夏曰、巧笑倩兮、美目盼兮、素以爲絢兮、何謂也。子曰、繪事後素、曰、禮後乎。子曰、起予者商也、始可與言詩已矣）

の二條が引かれるが、これに對して朱熹の弟子の輔廣はその『詩童子問』「卷首」の中で次のように注する。

この二節は、また、孔門の弟子たちが、詩を學ぶのに優れ、章句に拘ることなく、また、このようにその「言外の意」を得ることができたことを示しているのである（此下二節又見孔門弟子善於學詩、不泥章句而又能得其

言外之意如此）

右の文中に「言外の意」の語があるのが注目される。『論語』のこの二條は、詩經の詩句の斷章取義的利用の代表例である。斷章取義とは通常、後世の者がそれぞれの狀況において、自らの考えや主張を補強するため詩經の詩句を引用し、原義に拘らずに恣意的に意味を付與する行爲とされている[42]。そのような、詩人の意圖には顧慮しない讀解を輔廣は「言外の意」と呼んでいるのである。

輔廣は朱熹の高弟であり[43]、『詩童子問』も彼が親しく耳にした朱熹の詩經に關する教えをまとめた書物である[44]。と言うことは、斷章取義を「言外の意」とする認識も、朱熹から學んだ可能性が高い。これを確認してみよう。『晦庵先生朱文公文集』卷五二「答都昌縣學諸生[45]」に、『論語』「八佾」の子夏による斷章取義のエピソードに關する問答が載る。都昌縣の縣學の學生が、朱熹に次のように尋ねた。

孔子の「予を起こす者は商なり」について、諸先生の說を詳しく見てみましたが、みな禮はほんとうに後回しにしてよいと考えておりました。私がひそかに考えますに、〔子夏の「禮は後乎（か）」の〕「乎（か）」は疑いの氣持ちを表す助辭です。ですから、「禮は後か」は〔反語表現であって〕「禮は後にすべからず」と言うのと同じことです。ですから孔子は「予を起こす」と言ったのです。もし、子夏が孔子の考えに忠實に從っているのだったら、孔子も「予を起こす」と言うはずがありません。こうした解釋はいかがでしょうか（起予者商也、詳觀諸先生說、皆以謂禮果可後。愚竊謂乎者疑辭也。禮後乎、猶言禮不可後也。故夫子曰起予。若使子夏順從夫子之意、則不可謂

之起予。未知是否）

これに對して、朱熹は次のように答えた。

『論語』のこの章については、楊時（一〇五三～一一三五。二程の高弟）の解釋が的を得ている。「禮は後にすべからず」と解釋するのは誤りである。このエピソードは、孔子がただ繪を描くことについて、「素より後にす」、すなわち絹の上にまず胡粉を塗って下地を作ってから五色の繪の具で繪を描くと言ったのに[46]、子夏がその言外に「禮は後」という意味を導き出したものである。〔子夏は君が言うように孔子の考えに〕ただ忠實に從ったわけではない（此章之說、楊氏得之。禮不可後者非是。夫子方言繪事後素、而子夏於其言外發明禮後之意。非但順從而已也）

この對話でも朱熹は、子夏の斷章取義を「言外の意」と捉えている。彼が善しとする楊時の解釋は『論語集注』本條に引かれる[47]が、そこに、

孔子が「繪の事は素より後にす」とおっしゃると、子夏は「禮は後か」と言ったのは、孔子のお考えを受け繼ぐことができたものと言える。言語に表現されたものの外から摑み取れる者でなければこのようなことができようか。子夏と子貢が「與（とも）に詩を言うべき」者であるのはこのためである。もし章句の末節にばかり心を徘徊させ

ていたならば、そうしてなった詩篇の解釋は「頭の固い」ものになってしまう（孔子曰繪事後素、而子夏曰禮後乎、可謂能繼其志矣。非得之言意之表者能之乎。商賜可與言詩者以此。若夫玩心於章句之末、則其爲詩也固而已矣）

と言う。「言意の表」というのは「言外の意」と同義であろう。これから、『詩童子問』の例も朱熹から受け継いだものと考えることができ、朱熹はまた楊時の說を繼承したことがわかる。

楊時―朱熹―輔廣のこの用法は、これまで見てきた「言外の意」とは次元の異なるものである。これまで見てきた「言外の意」は理解の偏差こそあれ、いずれも詩句に表現されていない詩人の思いや考えを指していた。ところが楊時―朱熹―輔廣は、作者とは無關係な、後人の自由な讀解行爲によって生み出された意味を指して、「言外の意」と稱している。はたして、この「言外の意」は、これまで見てきた「言外の意」とまったく無關係なのだろうか。

楊時―朱熹―輔廣の擧げた斷章取義の例はいずれも、詩篇から道德的教訓を導き出したものである（本節で議論する「斷章取義」は、とりあえず楊時―朱熹―輔廣が擧げた『論語』の二條に限定することとする。すなわち、詩篇からその原義に拘泥せず何かしらの道德的教訓を導き出す行爲である）。ところで、黃忠愼氏が嚴粲について指摘したように、また第二節で漢唐詩經學から宋代詩經學に至るまでについて確認したように、詩經解釋史における「言外の意」は、基本的に小序と詩篇の内容との懸隔に架橋するための說明概念として用いられた。そして小序の大きな機能とは、詩篇の道德的意義を說明するということにあった。すなわち、これまで見てきた「言外の意」も「斷章取義」も詩篇から道德的意義を引き出すための行爲であるという點で共通する。異なるのは、漢唐詩經學にとって小序がす

なわち詩人の意としての道徳的教訓を説明するものであったに對し、楊時―朱熹―輔廣の「斷章取義」は詩人の意ではなく、後世詩篇を利用した人間によって恣意的に付與された道徳的教訓であるという點である。つまり、作詩の意であるか、用詩の意であるかという點で異なっているのである。

そもそも朱熹は、小序＝詩人の意とは認めず、小序の說の多くを後人が恣意的に付した說と見なした。であれば、朱熹にとって、小序と「斷章取義」とは何ら違いはないことになる。したがって、小序を尊重する學者たちが小序と詩篇の懸隔に架橋するための說明概念として「言外の意」を用いたように、朱熹―輔廣が「斷章取義」と詩篇との懸隔を架橋する說明概念として、「言外の意」を用いたのは、自然なことと言える。(48)

この用法に示された視點は、「言外の意」の地平を大きく擴大し、それを詩經解釋學史に位置付けるために重要な示唆を與えるものである。「言外の意」には、通常考えられている作詩の意とは別に、後代の人間が詩篇から自分なりに抽出した意味、すなわち用詩者の意も含み得、しかも兩者はそれぞれ別の次元に斷絶的に存在しているのではなく、連續した空間上に分布していると捉えられることを教えてくれるからである。また、このような視點から「言外の意」を考えれば、尊序と反序との關係を對立項としてではなく、共通の地盤の上に連續性を有して存在する、偏差の概念で捉えることが可能となる。

筆者は以前、漢唐詩經學における重要な解釋概念である「陳古刺今」（あるいは「思古傷今」とも稱する）と朱熹の淫詩說とを、その類似點と相違點に着目して考察したことがある。(49) その概要をまとめれば、次のようになる。

陳古刺今說は、小序に刺詩と規定されているにもかかわらず詩篇が理想的狀況を贊美する内容を持つ詩篇について、その懸隔を解消するのを大きな目的としてなされる。陳古刺今による解釋は、漢唐詩經學で盛んに行われ、北宋の歐

陽脩・王安石などもそれを繼承した。これに對して、南宋の朱熹は、「詩を以て詩を解す」――詩篇に表現された内容を素直に讀み取って解釋すること――を主張し、陳古刺今説を批判した(50)。

一方、朱熹が唱えた淫詩説は、男女の戀愛感情を謳歌する内容を持つ詩篇について、孔子がそのような詩篇を詩經に編入したのは、讀者がこれらの詩を讀み不道徳な行爲に對して嫌悪感を抱き、自ら道徳的な生活を目指すのを期待してのことであると説明するものである。

小序が詩篇の道徳的な意義を説明したものであるという點に着目すると、陳古刺今説と淫詩説は、いずれも詩句表現とそこから讀み取るべき道徳的内容との間に存在する齟齬を解消するための解釋方法であるという點で共通する。異なるのは、陳古刺今説では小序が詩篇から讀み取るべき道徳的教訓を讀者に一律に指示しているのに對し、淫詩説では不道徳な内容に對して讀者が一律に嫌悪感を起こすと想定されている點である。これは、別の見方をすれば、「淫詩である」という朱熹の注釋が、讀者の起こすべき反應（詩篇の内容に對する嫌悪感）を一律に指示していることになり、朱熹の注釋が陳古刺今説における小序の役割を擔っていることになる。陳古刺今説においては道徳的教訓が詩人によって詩篇に込められたもの（作詩の意）であるのに對し、淫詩説におけるそれは詩人の意圖したものではなく、讀者が詩篇をどのように役立てるか（用詩の意）であるという違いはあるが、詩經から道徳的教訓を導き出すための解釋概念であるという意味では共通の地盤の上に立っている。

このように見えると、陳古刺今説と淫詩説はちょうど、作詩の意としての「言外の意」と用詩の意としての「言外の意」（すなわち斷章取義）の兩者の關係と同構造である。

さらに筆者は、作詩の意と用詩の意とは地續きで、兩者を區切る境界線はそれぞれの學者によって任意に移動可能

であることを以前考察したことがある。[51] これを考え合わせるならば、「言外の意」を詩に内在するものとするか、「斷章取義」と同一視し、外部から任意に附加されるものとするかも、解釋者の自由に委ねられることになる。また、このように考えれば、作詩の意としての「言外の意」と用詩の意としての「言外の意」＝斷章取義との關係、陳古刺今說と淫詩說との關係、この兩者が同構造であるのも、儒學の一分野としての詩經解釋學の基本的性格から必然的に導き出されたものであることが理解できる。[52]

7　まとめ

以上の考察により、詩經解釋學における「言外の意」という概念は、その性格の相違からいくつかの種類に分けられることが明らかになった。大まかに言えば、次の三ケースに分けられる。

ア　詩人が意識的に用いた修辭技法としての「言外の意」
イ　詩人が無意識、無自覺に込めたものとしての「言外の意」、あるいは詞句に表現しきれない餘蘊としての「言外の意」
ウ　後世の人間が、詩篇からその原義にかかわらない道德的意義を任意に讀み取ったものとしての「言外の意」、すなわち「斷章取義」

このうち、アとイは、表現されてない詩人の眞意を指すもので、言わば「詩人の意（作詩の意）」としての「言外

の意」である。一方、ウは詩人の意とは無關係であり、後世の者が詩篇から任意に引き出したもので、「用詩の意」である。

そして、この三者はそれぞれ無關係に獨立して成立しているのではなく、連續性をもった偏差あるいは歷史的變容の相で捉えられることも明らかになった。このように見るならば、嚴粲の「言外の意」とそれを「泥」と批判した翁方綱の詩經觀も、まったくの對立項ではなく、一續きの流れの中で捉えることができる。

それでは、視點を變えて本稿で考察した「言外の意」は、詩經解釋學の修辭概念全體の中でどのように位置づけられるだろうか。

前節で見たように、陳古刺今說は詩句表現と作者の意圖との間の懸隔に橋渡しするために生まれた解釋概念であり、その意味で本稿で問題にした「言外の意」と共通する性格を有する。「言外の意」を廣義に設定したならば、陳古刺今もその下位に屬する修辭的概念の一種として、本稿で問題にした「言外の意」と竝列し得る。

嚴粲は、小雅「頍弁」『詩緝』で「言外の意」について議論して次のように言う。

> 國風、小雅は思いを言外に寓することが多い。思いは確かに表現の内に表れているが、優柔で紆餘曲折して讀者が氣付かないものがある。古についての敍述はあるが當代のことはない、しかし思いは當代を刺るところにあるものがある《雙行注。以下同じ—小雅「甫田」「采菽」の類》。乙のことを述べて甲については言わない、しかし思いは甲を刺るところにあるものがある《鄭風「叔于田」は、すべて叔段の事を述べるが、實は鄭の莊公を刺っている。唐風「椒聊」はすべて沃の盛強なことを述べるが、實は晉の昭公を刺る》。首章に思いを表し他の章

は韻を變えて歌にしているものがある《この類は非常に多い》。前の數章はみな思いを隱し、卒章ではじめて思いを表すものがある《齊風「載驅」の類》。首尾まったく本當の思いを表すことがないが、中間に思いがけない一二語を差し挟み、人に言わず語らずのうちに理解させるものがある《「碩人」「猗嗟」の類》。表現は輕いが思いは重いものがある《邶風「凱風」で、母が苦勞していることを言い、他家に嫁ぎたいと思っていることは言わないなど》。まず輕いところから歌い始め、だんだんと表現が重くなっていくものがある《小雅「四月」は世が亂れていることを憂えて、まず征役の苦勞を歎く。小雅「頍弁」は危亡を刺るのに、まず同姓と宴樂しないことを言う》。詩經を讀むというのは他の書物とは異なる。ただ詩篇の中にどっぷりと浸って、自由に泳ぎ回ってこそはじめて會得できるのだ（國風小雅多寓意於言外。或意雖形於言、而優柔紆餘、讀者不覺也。有言古不言時、而意在刺時者《如甫田、采菽之類》。有言乙不言甲、而意在刺甲者《如叔于田、全述叔段之事而實刺鄭莊、椒聊全述沃之盛強而實刺晉昭》、有首章便見意、餘章變韻成歌者《此類甚多》、有前數章皆含蓄而末章乃見意者《如載驅之類》、有首尾全不露本意、但中間冷下一二語、使人默會者《如碩人、猗嗟之類》、有言輕而意重者《如凱風、言母氏勞苦而不言欲嫁》、有先從輕處說起、漸漸說得重者《如四月憂世亂而先歎征役之勞、頍弁刺危亡而先說不宴樂同姓》。讀詩與他書別、唯涵泳浸漬乃得之）

「言外の意」として多種多様の修辭的技法が列擧され、我々の感覺では「言外の意」に含めないであろうと思われる「疊詠」も入っている。陳古刺今もまた「言外の意」の中に含まれている。嚴粲が「言外の意」を廣汎で多種多様な修辭表現を包括する概念として構想していることは重視すべきである。さらに注目されるのは、嚴粲がかくも多様

な「言外の意」を擧げる時、彼の脳裏には、「言外の意」が小序と詩篇との懸隔を架橋するためにあるという意識が必ずしも常にあったわけではなかっただろうということである。このことは、「疊詠」を「言外の意」に含めていることから推測できる。

と同時に、『詩緝』の個別の詩篇注釋における「言外の意」の用法を見ると、それほど多様性が認められるわけではないということも注意すべきであろう。例えば、『詩緝』の詩篇の注釋の中で「言外の意」の術語を用いて陳古刺今を説明している例は見當たらない。ましてや、「言外の意」によって「疊詠」を説明した例はない。これを見ると、彼の意識の中では、廣義の「言外の意」と狹義の「言外の意」とが併存しているようである。なぜ、このような現象が現れているかは今後の課題である

これは、嚴粲だけに見られる現象ではない。ここで思い浮かぶのは、本稿冒頭で紹介した司馬光の發言である。「意は言外に在り」の例として小雅「苕之華」の「三星　罶（りう）に在り」を擧げ、「久しくすべからざる」ことを言わんとしているとした。しかし「苕之華」の當該詩句を「言外の意」という術語を使って解說した例は、本書で取り上げた詩經注釋書の中には見當たらない。水面に映った星の光の消失によって「久しくすべからざる」ことを言い、周王朝が間もなく滅亡することを言うとするならば、これは通常は「比喩」の例とされるだろう。事實、鄭箋は「『久しくすべからざるは、周の將に亡びんとするを喩ふ』と言い、『正義』もそれに從い「喩」という語を用いて說明している。これを見ると、司馬光の認識では比喩もまた「言外の意」の範疇に入っていたと思われる。

本句には實は別の解釋の仕方もある。『集傳』『詩緝』は、本句は比喩ではなく詩人が目にした實景を直敍したものだと捉える。

梁の中に魚がいないので水は靜かである。ただ三星の光だけが映っているのが見えるばかりである○饑饉の餘波で、すべての物がこのように衰え廢れているのである（罶中無魚而水靜。但見三星之光而已○言饑饉之餘、百物彫耗如此）（『集傳』）

梁の中に魚がいれば、水が動いて水面に星が見えることはない。今、心宿の三星が梁の中に映って見えているというのは、梁を仕掛けても魚を捕まえられないということである。國家が混亂滅亡に瀕する時代は、地はその寶をこの世に生み出すのを惜しむので、物産は乏しく、氣象は蕭條たる様になるのである（笱中有魚則水動而不見星。今心之三星見於魚笱之中、是設笱而不得魚也。亂亡之代、地愛其寶、物産凋耗、氣象蕭條）（『詩緝』）

朱熹や嚴粲は、簗に堰き止められた水面が動かないのは魚が泳いでいないからで、これは寡婦が生活の糧を得られないことを意味する、ここから周王朝が滅亡の淵に立たされた現在、物資も缺乏し、人々が饑えに瀕していることを暗示するととるのである。南宋以後はこの解釋をとるものが多い。作者は周王朝が滅亡の危機に瀕していることを傳えようとして本句を詠っているのであるから、これも「言外の意」という範疇で論じることは充分可能であろう。しかし、彼らはこの語を使っていない。

このように見ると、「言外の意」およびその類語は、一般的には極めて廣範な修辭概念と考えられる一方、具體的な詩篇の解釋の場面においては、かなり限定された内容を持つ術語として用いられるという二面性を有していた可能性がある。これはあるいは、「言外の意」という太陽系を構成する星々の一つとして、「言外の意」という星が存在し

ていると表現できるだろうか。この時、「言外の意」という星が、「言外の意」太陽系の惑星なのか衛星なのか、あるいは恒星なのか、これは今後明らかにしていかなければならない問題である。今後、「言外の意」の有するこの二面性を常に意識しつつ考察を進めていくことが必要である。

本稿では、「言外の意」の本格的な使用者として、南宋の嚴粲にスポットを當てたが、彼が影響を受けた詩經學者、言い換えれば、嚴粲に先立って「言外の意」概念による詩篇解釋を本格的に志向したのがどのような學者であったのかは、當然考えなければならない問題である。本稿の中で、あるいは嚴粲の先蹤と考えられるかもしれない說が『呂記』に複數見出された。これは、呂祖謙が「言外の意」說に重要な役割を果たしたことを示しているのかもしれない。稿を改めて考察したい。

本稿では、詩經解釋學史における「言外の意」に考察の視點を限定して論じたが、當然ながら「言外の意」は文學一般、あるいは言語表現一般に普遍的に存在する現象であり、そのような廣い視野に立った研究も多くの蓄積がある。(33) 筆者は現段階でそれらを參照することはできていない。このことは、本稿の考察の妥當性を檢證する上で積み殘された課題として銘記しなければならない。

注

（1）司馬光『溫公續詩話』の譯注としては、許山秀樹・松尾肇子・三野豐浩・矢田博士「『溫公續詩話』譯注稿」（愛知大學語學教育研究室『言語と文化』第九號、二〇〇三）がある。本文ではこの譯注を參考にしつつ、筆者の意をもって翻譯した。

（2）小雅「苕之華」序に、「大夫閔時也。幽王之時、西戎東夷交侵中國、師旅竝起、因之以饑饉。君子閔周室之將亡、傷己逢之、故作是詩也」と言う。

（3）鄭箋に、「不可久者、喩周將亡、如心星之光耀、見於魚笱之中、其去須臾也」と言う。

（4）毛傳に、「留、曲梁也。寡婦之笱也」とある。

（5）『正義』に、「三星之光耀在於魚罶之中、其去斯須、不可久也。以喩周室之亡期將至、欲望其存、亦不可久也」と言う。

（6）詩經の詩篇がもと歌謠として歌われたものということを考えれば、詩篇を受容するものとしては讀者の他に聞き手も含まれる。ただし、本稿では煩雜を避け、これ以後は「讀者」の語で受容者を代表させるものとする。

（7）「簒奪者に獻げる讚歌――類淫詩說を廻る朱熹・嚴粲と戴震・翁方綱との關係――」（慶應義塾大學日吉紀要『中國研究』、第十二號、二〇一九年三月）六三頁參照。なお、「類淫詩說」は筆者の造語であるが、その定義についても上記拙論を參照されたい。

（8）同右。

（9）黃忠愼『嚴粲詩緝新探』（臺灣・文史哲出版社、二〇〇八）、特に第二章（三）2「美刺說與言外之意的關聯」および第四章、六、「結語」。同「方玉潤『詩經原始』論詩的言外之意」（『詩經研究叢刊』第十九輯、二〇一七、研文出版）第十四章「詩を道德の鑑とする者――陳古刺今說と淫詩說から見た詩經學の認識の變化と發展――」、「詩人のまなざし、詩人へのまなざし――詩經における詩中の關係についての認識の變化――」、第十六章「作者の意圖から國史と孔子の解說へ――嚴粲詩經解釋における尊序尊重の意義――」、前揭拙論二〇一九年三月。

（10）拙著『詩經解釋學の繼承と變容――北宋詩經學を中心に据えて――』（二〇一七、研文出版）第十四章「詩を道德の鑑とする者――陳古刺今說と淫詩說から見た詩經學の認識の變化と發展――」、「詩人のまなざし、詩人へのまなざし――詩經における詩中の關係についての認識の變化――」、第十六章「作者の意圖から國史と孔子の解說へ――嚴粲詩經解釋における尊序尊重の意義――」、前揭拙論二〇一九年三月。

（11）黃忠愼氏前揭書三〇頁。

（12）同右三一頁。

（13）同右三一頁。

（14）同右二九頁。

（15）『詩緝』における「言外」の用例は以下の通り。

①林希逸撰「詩緝原序」　二例
②自序　一例
③毛詩大序　一例
④周南「葛覃」首章　一例
⑤周南「螽斯」首章　一例
⑥召南「鵲巢」首章　二例

⑦鄘風「君子偕老」卒章　一例
⑧鄘風「桑中」序　一例（『呂記』からの引用）
⑨衞風「河廣」卒章　一例
⑩齊風「鷄鳴」序　一例
⑪齊風「猗嗟」卒章　一例
⑫唐風「山有樞」首章　一例
⑬曹風「蜉蝣」第二章　一例（『范補傳』からの引用）
⑭小雅「頍弁」序　一例
⑮大雅「蕩」卒章　一例

（16）齊風「南山」序の鄭箋に、「襄公之妹、魯桓公夫人文姜也。襄公素與淫通……莊公即位後乃來、猶復會齊侯于禚、于祝丘、又如齊師」と言う。

（17）『春秋左傳』「莊公十一年」に載る、魯が宋と乘丘の地に戰った時、莊公が金僕姑の矢を放ち、宋の大夫の南宮長萬を射た故事。

（18）朱熹『集傳』は呂祖謙のこの說を引用し、「章外」を「言外」に作る。ここからも「章外」が「言外」と同義であることが裏付けられる。

（19）呂祖謙が蘇轍の說を「言外の意」を用いた解釋として不徹底であると批判したのは、彼が「言外の意」を重視した解釋を前進させたことを暗示しているかも知れない。ただし、『呂記』には「言外」「章外」の術語を用いた例は少ない（合わせて二例のみ）。したがって、彼の「言外の意」解釋に對する貢獻は、稿を改めて愼重に考察する必要がある。

（20）齊風「南山」序に、「刺襄公也。鳥獸之行、淫乎其妹。大夫遇是惡、作詩而去之」と言う。「敝笱」序に、「刺文姜也。齊人惡魯桓公微弱、不能防閑文姜、使至淫亂、爲二國患焉」と言う。兩詩の內容はいずれも歌う對象を贊美するものでない。この點、「猗嗟」とは異なるので、兩詩の持つ懸隔の構造は「猗嗟」より單純で、なぜ魯の君主を刺った詩が齊風に編入されているかという一點である。

（21）このことについては、前揭拙論二〇一九年三月ですでに考察したが、本稿の論旨にとって重要な問題であるので再度說明する。

（22）『正義』に「猗是心內不平、嗟是口之喑啞、皆傷歎之聲、故爲歎辭」と言う。

（23）鄭箋に「人君、小君也。或者『小』字誤作『人』耳」と言う。「小君」は、諸侯の夫人のこと。

（24）前節で検討した「君子偕老」『詩緝』の中で、「君子偕老」「猗嗟」とともに「言外の意」の代表例として挙げられていた衞風「碩人」はよい例になる。小序に、

「碩人」は、莊姜を憐れんだ詩である。莊公はお氣に入りの側室に惑わされ、驕り昂ぶって身の程知らずな振る舞いをさせた。莊姜は賢かったが、然るべき待遇でもてなされず、とうとう子供が生まれなかった。國人は彼女を憐れみ憂えた（碩人、閔莊姜也。莊公惑於嬖妾、使驕上僭。莊姜賢而不答、終以無子、國人閔而憂之）

と言い、本詩は詩人が衞の莊姜を憐れんだ詩とするが、詩篇は莊姜への賛美の言が連ねられていて、小序と詩句とに懸隔がある。本詩第三章に、

大夫夙退　大夫　夙く退け
無使君勞　君をして勞せ使むること無かれ

という句があるが、これに對して嚴粲は次のように言う。

莊姜は禮に從ってやって來て嫁いだのだから、夫に應えられないことがあるべきではない。ひょっとしたら我が主君は政事に疲れて、夫人と相親しむ餘裕がないのではないだろうか。もしそうだとしたら、もろもろの大夫で朝廷にやってくる者たちはとりあえず早々に退出なさり、我が主君が政の裁斷を下すのにお疲れにならないようになさるのがよろしい○君主が莊姜にお應えにならないのは、彼のお氣に入りの側室に惑わされたのが原因なのだが、本詩はそれが政治に疲れたことが招いたことと言う……風人の言葉というのは微妙で婉曲なものである（莊姜以禮來嫁。不應不見答。豈吾君疲於政事而未暇與夫人相親耶。若是則諸大夫聽朝者宜且早退。無使吾君勞於聽斷可也○君之不答莊姜以惑於嬖妾之故、而此詩以爲勞於政事所致……風人之辭微婉矣）

「風人」の表現が婉曲であるということを、「言外の意」と結びつけて說明しており、嚴粲が、國風の詩人にとって意を言外に込めることは重要な技法であったと認識していることがわかる。と同時に、詩人は鍵になる言葉を詩中に忍ばせており、讀者（聽き手）がそれに注目することによって「言外の意」を解き明かすことを期待しているとも考えている。

風人は莊姜が應えられなかったことを直接は言っていない。ただ、首章で彼女の親族について一つ一つ述べ、これを讀む者がこのように歌うのは、莊姜は然るべき待遇を受けなかったことを暗示しようとしているのをわかってもらいたかったのであり、衞國の人々は自然とそれがわかったのであり、誰にもわかるように言う必要がなかったのである（風人不直言莊姜不見答之事。但首章歷述其親族、欲讀之者知其爲莊姜則不見答之事、國人自知之、不待察察言之矣）

（「碩人」首章『詩緝』）

（25）釋大典『文語解　附索引』（汲古書院、一九八四）巻之二「設」に、「設爲」について「コレハワザトノ義ナリ」と言うのに據る。

（26）「猗嗟」卒章『詩緝』で、嚴粲は「言外の意」を明らかにする鍵になる句「展我甥兮」について「詩人設爲諱護之辭以譏之」と言い、本例と同じく、「設爲」の語を用いている。さらに、後文に引用する衞風「河廣」でも「設爲」の語が用いられている。ここからも、嚴粲が、「言外の意」が詩人の意圖的な修辭表現と親和性が高いと考えていたことが窺える。

（27）これを念頭に置けば、卒章『詩緝』に、

　このような人であってこそ、國を代表する美女である。歎き惜しみ不滿に思う氣持ちが言外に現れている（如此人乃邦之美女。歎惜不滿之意、見於言外矣）

と、「歎惜不滿の意」を言外に表すのも、詩人が相手無く漏らした歎聲ではなく、宣姜と向き合って、思わず漏らしたものだと嚴粲は考えていると推測できる。

（28）朱熹『集傳』でも、本詩題下注にこの『呂記』の說を引用している。しかし、本文に引いた首章、卒章『集傳』から窺えるように、『呂記』の說から具體的な影響を受けている形跡は見當たらない。

（29）注（15）で示した『詩緝』における「言外」の用例を見ると、十七例中十一例（十首）が、國風の詩篇の注釋中に用いられている。

（30）ただし、嚴粲は本文の引用に續けて次のようにも言う。

　明白で正大、事柄を直接言うのは、雅のスタイルである。雅のスタイルに純粹に作られたのが、雅の大なるものであり、風のスタイルをまじえたものが雅の小なるものである（明白正大、直言其事者、雅之體也。純乎雅之體者、爲雅之大、雜乎風之體者、爲雅之小）

嚴粲は、「言外の意」は國風の特徵的スタイルではあるが、二雅のうち小雅は國風と親近性があり、風のスタイルが混在すると考えている。

（31）『詩緝』中に、全八例見える。內譯は次の通り。

①周南「螽斯」首章、②召南「鵲巢」首章、③邶風「燕燕」首章、④衞風「碩人」序、⑤同首章、⑥同第三章、⑦同「竹竿」首章、⑧唐風「揚之水」卒章。

（32）召南「鵲巢」首章『詩緝』も、やはり意識的な修辭としての言外の意の性格が強い。

風人の思いは言外にある。およそ人が賢者であることを言うのに、ただ、彼の服飾の美しさだけを美め稱える。本詩は、夫人の德を言うのに、ただ完成された王業を彼女が居ながらにして享受していると言う。これはそれにふさわしい德を彼女が具えていることは、自ずから言外に現れるのである。文王の家を齊える德化によるのでなければ、どうしてこのような狀況がもたらされようか（風人意在言外。凡言人之賢、但稱其服飾之美。此言夫人之德、亦但稱其坐享成業。是其有德以稱之、自見於言外矣。非文王齊家之化、何以致此）

（33）拙論「同情と配慮のレトリック――戴震『毛詩補傳』に見られる嚴粲詩經學の影響――」（『日本宋代文學學會報』第三號、二〇一七）參照。

（34）拙論二〇一九年三月、第六節。『詩附記』の關連する部分は以下の通り。

展我甥兮、詩人之詞、意在言外、面面俱到。序之末句不必泥也。即春秋書子同生、亦聖人化工之筆、出於無意、而況此詩乎。如必泥展字、則展也大成又當作何解。

（35）拙論「詩のわからなさと向かいあって――戴震との比較から見た翁方綱『詩附記』の特徵――」（『中國――社會と文化』第34號、二〇一九）參照。

（36）「微詞」の語は、朱熹の用語を用いたものである。本詩第二章『集傳』に、「姊妹之子曰甥。言稱其爲齊之甥、而又以明非齊侯之子、此詩人之微詞也……則莊公誠非齊侯之子也」と言う。ただし、朱熹は「微詞」の意味内容を說明してはいない。賀貽孫が批判する「微詞」を穿鑿した學者として想定するとすれば、むしろ嚴粲の方がふさわしい。

（37）「尊其瞻視」は、『論語』「堯曰」に「君子正其衣冠、尊其瞻視、儼然人望而畏之、斯不亦威而不猛乎」とある。

（38）朱熹は、この語は魯の莊公が實は文姜と齊の襄公との不義の子だという風評を否定するために發せられたものではあるが、同時にそのような風評を起こさせているのも、母の不義を止めることができない莊公のふがいなさのなせる業だという批判の意が込められていると言っていると考えられる。

（39）『集傳』における「言外」の用例は一例。かつそれは朱熹自身の經說ではなく、他人の說の引用中に現れる。「猗嗟」題下注に『呂記』の說を引き、「東萊呂氏曰、此詩三章譏刺之意皆在言外。嗟嘆再三、則莊公所大闕者不言可見矣」と言う。

◆「此」、『呂記』作「是」。◆「三章」、『呂記』無。◆「言外」、『呂記』作「章外」。◆「則」、『呂記』作「而」。

（40）『文淵閣四庫全書電子版』に據って調査した。十三例は、南宋で最多、その次は樓鑰『攻媿集』の九例。

（41）例えば、『晦庵先生朱文公文集』卷三一「與張敬夫論癸巳論語說」に、『論語』「述而」の「述而不作」についての張栻の「聖人所以自居者平易如此（雙行注で朱熹の評語「平易二字說不着」あり）老彭孔子事同而情性功用則異」という說を引き、

雙行注にこれに對する評語を述べて「大率此解多務發明言外之意、而不知其反戻於本文之指。爲病亦不細也」と言う（四部叢刊正編52）。

（42）拙論「二つの斷章取義――宋代における「如切如磋、如琢如磨」解釋の展開」――」（『日本宋代文學學會報』、第五號、日本宋代文學學會、二〇一八年十二月）、「すべて本義のために――翁方綱の斷章取義說の性格とその詩經學史的位置付け――」（慶應義塾大學日吉紀要『中國研究』、第十三號、二〇二〇年三月）。參照。

（43）田中謙二「朱門弟子師事年攷」二十「輔廣」（『田中謙二著作集』第三卷、汲古書院、二〇〇一）參照

（44）『四庫提要』經部、詩類「詩童子問十卷提要」に、「是編大旨、主於羽翼詩集傳、以述平日聞於朱氏之說、故曰童子問」と言う。

（45）四部叢刊正編『朱文公文集　一』（臺灣商務印書館）卷五二、四三葉表。

（46）『論語集注』本條に、「素、粉地、畫之質也、絢、彩色、畫之飾也。言……如有素地而可采色也……後素、後於素也……謂先以粉地爲質、而後施五采」と言う。筆者は『四書章句集注』（新編諸子集成（第一輯）、中華書局、一九八三）を用いた。

（47）楊時の說は、『論語集注』の他、『論語精義』卷二上「八佾」にもやや詳しく引かれる（『朱子全書　修訂本』第七册、上海古籍出版社、安徽教育出版社、二〇一〇、一〇九頁）。

（48）楊時の小序に對する認識は今後の考察の對象としたい。故に、ここでは朱熹とその後繼者輔廣についてのみ言う。

（49）前揭拙著第十四章參照。

（50）檀作文『朱熹詩經學研究』（學苑出版社、二〇〇三）第一章第二節參照。

（51）前揭拙著第十五章參照。

（52）本節の考察に關聯して、黃忠愼前揭論文、二〇一一が、「方玉潤標榜追尋言外之意的讀『詩』法、也尊重早期斷章取義式的用『詩』習慣」（四一七頁）と言うのは、晩淸の詩經學者方玉潤が「言外の意」と「斷章取義」とを一つの視野のもとで捉えていた可能性を示唆するものとして注目すべき指摘である。確かに、『詩經原始』卷首下「詩旨」に、「案、詩多言外意、有會心者卽此悟彼、無不可以貫通。然唯觀詩、學詩、引詩乃可、若執此以釋詩、則又誤矣。蓋觀詩、學詩、引詩、皆斷章以取義、而釋詩則務探詩人意旨也。豈可一概論哉」（中華書局排印本、一九八六、上册、五一頁）とあり、「言外の意」と「斷章取義」とを關聯づけて論じている。ただし、本稿ではこの問題を詳しく考察する餘裕がなかった。今後の課題としたい。

（53）このことに關して參考すべきものに、例えば陳麗梅『「言外之意」修辭現象研究』（中國社會科學出版社、二〇一六）がある。

テキスト

●唐・孔穎達等奉勅撰『毛詩正義』（略稱『正義』）
十三經注疏附挍勘記（嘉慶二十年江西南昌府學刊本景印）第二册（臺灣・藝文印書館）に據りつつ、十三經注疏整理本（北京大學出版社、二〇〇〇）第四～六册を參照した。
なお、臺灣中央研究院の漢籍電子文獻（Scripta Sinica）瀚典全文檢索系統2.0版（史語所漢籍全文資料庫計畫制作）所收の『十三經注疏』を、字句の檢索に活用した。

●北宋・歐陽脩撰『詩本義』
四部叢刊廣篇、據吳縣潘氏滂憙齋藏宋刊本影印本。

●北宋・王安石『詩經新義』（略稱『新義』）
程元敏輯、『三經新義輯考彙評（二）―詩經』（中華叢書、臺灣、國立編譯館、一九八六）

●北宋・蘇轍『詩集傳』（略稱『蘇傳』）
續修四庫全書據淳熙七年蘇詡筠州公使庫刻本影印本（上海古籍出版社、二〇〇二）

●南宋・范處義『詩補傳』（略稱『范補傳』）
文淵閣四庫全書本

●南宋・呂祖謙『呂氏家塾讀詩記』（略稱『呂記』）
四部叢刊廣編04、據常熟瞿氏鐵琴銅劍樓藏宋刊本影印本

●南宋・朱熹『詩集傳』（略稱『集傳』）
四部叢刊廣編04、據靜嘉堂文庫藏宋本影印本

●同「詩序辨說」
『朱子全書　修訂本』第一册（上海古籍出版社・安徽教育出版社、二〇一〇）

●同『朱子語類』（略稱『語類』）
王星賢點校、理學叢書（中華書局、一九八六）

●南宋・輔廣『詩童子問』
詩經要籍集成（學苑出版社、二〇〇二）

●南宋・嚴粲『詩緝』
據明趙府味經堂刊本影印本（臺灣・廣文書局、一九七〇）
●元・劉瑾『詩傳通釋』
元代古籍集成經部詩類（北京師範大學出版社、二〇一三）
●明・鍾惺『批點詩經』
詩經要籍集成二編據明凌氏朱墨套印本影印（學苑出版社、二〇一五）
●清・賀貽孫『詩觸』
詩經要籍集成二編據清刻本影印（學苑出版社、二〇一五）
●清・戴震『毛詩補傳』
安徽古籍叢書『戴震全書（修訂本）』第一册（黄山書社、二〇一〇）
●清・翁方綱『詩附記』
柏克萊加州大學東亞圖書館校抄校本叢刊、翁方綱經學手稿五種第三種（上海古籍出版社、二〇〇六）
●『文淵閣四庫全書電子版――原文及全文檢索版』
上海人民出版社・迪志文化出版有限公司

○本稿の構想については、二〇一九年八月に訪問學者として慶應義塾大學に滯在された臺灣大學中文系史甄陶副教授との議論に負うところが大きい。氏からはまた、本稿で用いた文獻資料も多く紹介していただいた。ここに記して感謝の意を表する。